

WANSynchA® Oracle Server™

WANSynchA Oracle Server 操作ガイド



ライセンス情報

Copyright CA XOsoft 2000-2006. All rights reserved.

This product is based on software developed by CA XOsoft.

Redistribution and use of the guide in both source and binary form, is permitted, provided that the above copyright notice and this paragraph are duplicated in its entirety, and that any documentation, advertising materials and other materials related to such distribution and use, acknowledge that the software was developed by CA XOsoft.

This software is provided as is and without any expressed or implied warranties, including, without limitation, the implied warranties of merchantability and fitness for a particular purpose.

All other trademarks used in this document are the property of their respective owners.

リビジョン履歴

リビジョン	日付	説明
50.0	2005 年 4 月	新規フォーマットの初期リリース
50.1	2005 年 6 月	DHCP が割り当てたアドレスに関する警告を「要件」に追加。 WANSync サービスのログオン アカウントに関する注をマニュアル全体に追加。
50.2	2005 年 8 月	Oracle Server サービスに関する情報をマニュアル全体で明確化。 以前の第 1 章および 2 章を、第 1 章に統合。 自動検出のイメージとルート ディレクトリのイメージを置き換え。
50.3	2006 年 2 月	章の再編成。
50.3	2006 年 4 月	マニュアル全体の書き換えと再編成。
61.0	2006 年 4 月	新しいソフトウェアのリリース。
61.1	2006 年 5 月	付録 A 「WANSynchA のヒント」に「アクティブサーバのリカバリ」と 「読み取り専用 Web GUI」を追加。 付録 D 「スイッチ コンピュータ名リダイレクション」の削除。 編集上の変更
65.0	2006 年 7 月	新しいソフトウェアのリリース。
65.1	2006 年 7 月	編集上の変更
66.0	2006 年 10 月	新しいソフトウェアのリリース。
67.0	2006 年 11 月	新しいソフトウェアのリリース。



リビジョン履歴

目次

ライセンス情報

リビジョン履歴

目次

1 はじめに

このマニュアルについて	1
関連するマニュアル	1
要件	2
インフラストラクチャ	2
ログオンアカウント	2
非侵入性インストール	3
使用するリダイレクション方式の決定	3
ワークグループ内で稼働している Oracle サーバ	4
クラスタについて	4
ライセンスキー	4
WANSyncHA のコンポーネント	5

2 サーバセットアップ

WANSync マネージャのインストール	7
サーバの準備	8
XOsoft リモートインストール ウィザード	8
マスター サーバ	12
レプリカ サーバ	12
レプリケーション シナリオの設定	14
新規シナリオの作成	14
ウィザード以外からのシナリオの実行	25

3 スイッチオーバーとスイッチバック

スイッチオーバー	27
スイッチバック	28

A WANSyncHA のヒント

スプールの設定	31
高帯域幅の WAN 回線用の WANSync 調整	31
アクティブサーバのリカバリ	32
読み取り専用 Web GUI	34

B 自動スイッチオーバー / リバース レプリケーション

自動スイッチオーバー	37
自動リバース レプリケーション	37
推奨事項	37



C IP 移動リダイレクション

マスター サーバでの IP 移動	39
WANSync マネージャでの IP 移動	40
新しいシナリオの場合	40
既存のシナリオの場合	41
マスター クラスタでのクラスタ IP 移動	42
WANSync マネージャでのクラスタ IP 移動	43
新しいシナリオの場合	43
既存のシナリオの場合	44

索引

ANSyncHA for Oracle は、非同期リアルタイム レプリケーション、および自動アプリケーション スイッチオーバーとスイッチバックに基づく **Oracle** 向けの高可用性ソリューションで、32 ビットと 64 ビットの **Windows** サーバ、および **MSCS** クラスタにおいて、コスト効率の良いビジネスの継続を可能にします。

WANSyncHA が提供する機能は、ミッションクリティカルなデータベース サーバの、手動もしくは自動による LAN や WAN 上でのスイッチオーバー、Oracle 対応のステータス モニタリング、データ破損に対するための統合化された継続的なデータ保護などです。これらすべてが、設定および管理しやすい標準化されたかたちで提供されています。

データの流れはすべての組織の中核をなすものであり、Oracle はデータストレージと管理において、最新のビジネスインフラストラクチャの中心的な存在になっています。惨事が発生したときには、それが台風や停電であろうと、あるいはより可能性の高いウィルス攻撃や、ソフトウェアやユーザのエラーであろうと、その危機に対応する能力こそが、ビジネスの輝かしい未来と、終焉を分けるものとなり得ます。控えめに言っても、ビジネスの損失のため多大なコストを負うことになるでしょう。さらに肝心なのは、顧客、投資家、および他の出資者からの信頼を失いかねないということです。Oracle 惨事復旧は、単なる保険ではありません。それは競争力の維持に関わる問題でもあります。

WANSyncHA を使用することで、優位に立つことが可能になります。

このマニュアルについて

このマニュアルでは、WANSyncHA を使用した Oracle 8i、9i、または 10g の高可用性ソリューションの実装方法について説明します。開始する前に各手順を確認してください。各タスクを実行するには、適切なリソースと権限が必要になります。

関連するマニュアル

- ## ◆ WANSync ユーザ ガイド

要件

このセクションでは、WANSyncHA for Oracle を使用するための要件について説明します。

インフラストラクチャ

WANSyncHA for Oracle を使用して高可用性を実装するには、以下の要件を満たしている必要があります。

- ◆ 両方のサーバで同じ Windows 2000/2003 バージョンを使用していて、同一のサービス パックとホット フィックスがインストールされている
- ◆ 両方のサーバの Oracle バージョンが同じであり、同一のサービス パックとホット フィックスがインストールされている
- ◆ Oracle SID がマスタ サーバとレプリカ サーバ間で一致している
- ◆ 両方のサーバで、すべての Oracle サービスがブート時に正常に起動しており、[自動] に設定されている
- ◆ ORACLE_HOME ディレクトリへのパスとデータベース ファイルへのパスが、マスタ サーバとレプリカ サーバで同じである
- ◆ レプリケーション トラフィックを最小限にするために、Oracle の一時表領域がレプリケーションから除外されている（レプリカ サーバの Oracle データベースが、マスタ サーバで使用されている一時表領域名およびパスと同じ名前で設定されていることを確認します）
- ◆ 両方のサーバの Oracle がサービス起動時にデータベースを自動的にマウントするように設定されている (oradim -edit -sid ORACLE_SID -startmode auto)
- ◆ すべての IP アドレスが静的に割り当てられている（マスタ サーバまたはレプリカ サーバの DHCP が割り当てた IP アドレスはサポートされていません）
- ◆ 保護対象のサーバがドメイン コントローラまたは DNS サーバではない

ログオン アカウント

WANSync サービス ログオン アカウントは、以下の条件をすべて満たしている必要があります。

- ◆ ドメイン管理者グループのメンバであること。ドメイン管理者グループがビルトイン ドメイン ローカル グループ管理者のメンバでない場合は、そのメンバであるアカウントを使用する必要があります。
- ◆ ローカル マシン管理者グループのメンバであること。ドメイン管理者グループがメンバでない場合は、そのアカウントを手動で追加します。



会社のセキュリティ ポリシーにより、より細かな権限設定が必要とされる場合は、テクニカル サポートに連絡して詳細な手順を確認してください。

ワークグループ内のサーバの場合は、ローカル管理者であるアカウントを使用します。

非侵入性インストール

WANSyncHA のインストールおよび環境設定中も、マスタ サーバの **Oracle** は中断されずに稼働を続けます。

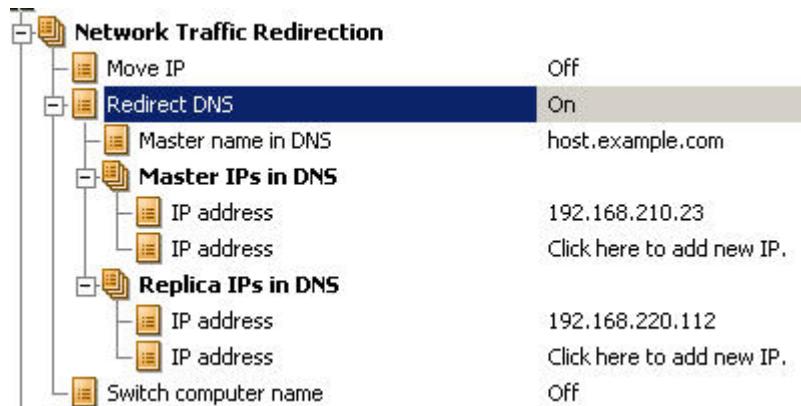
使用するリダイレクション方式の決定

スイッチオーバー後にクライアントをリダイレクトする方式には、「DNS リダイレクト」、「IP 移動」、および「カスタム スクリプト」の 3 種類があります。各方式は単独で使用することも、任意の組み合わせで使用することもできます。

◆ DNS リダイレクト

この推奨方式は、ほとんどのネットワーク環境（**LAN** および **WAN**）で動作します。DNS リダイレクトでは、マスタに障害が発生すると、レプリカ サーバによって適切な DNS レコードが変更され、**Oracle** サーバへの参照がマスタの IP アドレスではなくレプリカの IP アドレスに解決されます。このソリューションが最も実装が簡単で、ネットワークの再設定も必要としません。DNS リダイレクトは **A**（ホスト）タイプ レコードにのみ有効で、**CNAME**（エイリアス）レコードは直接更新できません。しかし、**CNAME** レコードが変更された **A** レコードをポイントしている場合は、間接的にリダイレクトされます。

マスタ サーバの名前が付いたレコードが使用されるようにデフォルトが設定されていますが、[Switchover Properties] タブの [Master's name in DNS] 設定を使用して、任意の DNS（ホスト）レコードにリダイレクトするように WANSyncHA を設定することができます。



◆ IP 移動

IP 移動リダイレクションは、マスタ サーバとレプリカ サーバが同じネットワーク セグメントにある **LAN** 環境でのみ使用できます。この設定では、マスタ サーバでスイッチオーバーが発生すると、レプリカ サーバがマスタ サーバに割り当てられた 1 つ以上の IP アドレスを引き継ぎます。

IP 移動を使用する場合は、レプリケーション シナリオの環境設定を行う前に「IP 移動リダイレクション」を参照してください。

◆ カスタム スクリプト

WANSyncHA では、ユーザ リダイレクション、またはビルトイン方式でカバーされていない追加手順を実行するために、カスタム スクリプトまたはバッチ ファイルを実行できます。上記の方式が適切でない、またはすべての要件を満たさない場合は、「WANSync ユーザ ガイド」でスクリプトリダイレクション方式の詳細を参照してください。

ワークグループ内で稼働している Oracle サーバ

ワークグループ内のサーバの場合は、ローカル管理者グループのメンバであるユーザに **XOsoft Engine** サービス アカウントを設定します。ワークグループ内のサーバは、安全でない更新を認める DNS サーバでのみ DNS リダイレクトを使用できます IP 移動、スイッチ コンピュータ名、およびカスタム リダイレクション スクリプトは通常どおり使用できます。

クラスタについて

WANSyncHA では、クラスタへのインストールは、標準のインストールとほぼ同じように実行できます。クラスタに **WANSyncHA** の環境設定を行うには、保護するグループ内の仮想サーバ ネットワーク名（または IP アドレス）リソースを、マスタまたはレプリカ名として入力します。シナリオを構成する際に、ノード名または IP アドレスは使用しないでください。また、**XOsoft** エンジンをすべてのクラスタ ノードにインストールする必要があります（「サーバ セットアップ」を参照）。

クラスタ環境で IP 移動を使用する設定の場合にのみ、いくつかの準備が必要になります。クラスタ環境で IP 移動を使用する方法の詳細については、「マスタ クラスタでのクラスタ IP 移動」を参照してください。

ライセンスキー

WANSync マネージャを初めて起動する時に、ライセンスキーの入力を求められます。このキーで、使用可能なシナリオの種類と機能が決まります。キー全体を先頭のテキスト ボックスに直接貼り付けることで、容易にキーを入力することができます。後続のテキスト ボックスには自動的にキーが入力されます。マネージャを開いて、[Help] - [About] メニューからライセンスキーを確認して適用することができます。



WANSyncHA のコンポーネント

WANSyncHA は以下のコンポーネントで構成されています。

- ◆ **XOsoft エンジン**

WANSync のサービス - シナリオに関する各サーバ上で動作します。

- ◆ **WANSync マネージャ**

管理 GUI - WANSyncHA を管理し、設定するために使用します。

- ◆ **XOsoft リモート インストーラ**

リモート展開ウィザード - XOsoft エンジンを複数のサーバ、またはクラスタ ノードに同時に展開するために使用します。



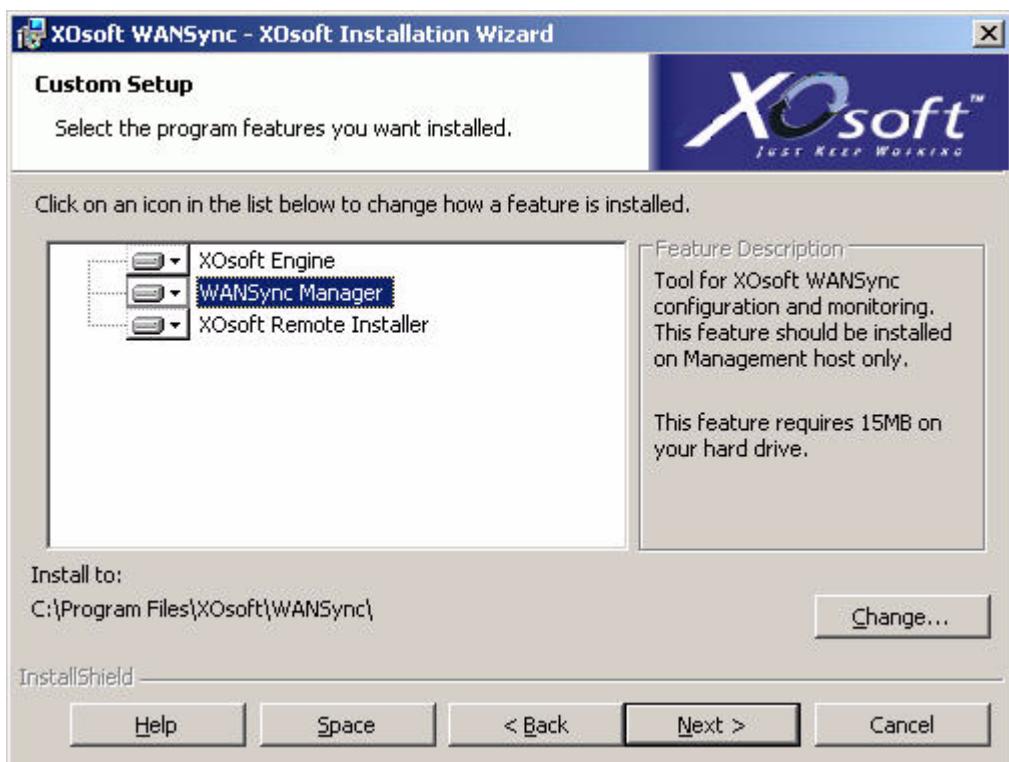
サーバセットアップ

2

この章では、WANSynchA for Oracle Server の一般的なセットアップについて説明します。

WANSync マネージャのインストール

WANSynchA シナリオを設定するマシンに、WANSync マネージャとリモートインストール ウィザードをインストールします。WANSync マネージャのインストール場所は、惨事発生時にアクセス可能な場所であれば、どこでもかまいません。一般的に、WANSync マネージャは管理用のワークステーションにインストールします。



WANSync マネージャをマスター サーバまたはレプリカ サーバに直接、インストールする場合は、Xosoft Engine もインストールしてください。

Xosoft リモートインストーラを使用する場合（推奨）、Xosoft リモートインストーラを実行するマシンには、.Net Framework 2.0 がインストールされている必要があります。.Net Framework はリモートインストール ウィザード（GUI）を実行するマシンにのみ必要で、ターゲット サーバには必要ありません。

シナリオは実行後、マスター サーバおよびレプリカ サーバにキャッシュされます。キャッシュされたシナリオは、[File] メニューから [Download] を選択して、インストールされている任意の WANSync マネージャにダウンロードできます。ダウンロード後、マスター サーバまたはレプリカ サーバの名前を入力します。

サーバの準備

以下のセクションでは、WANSyncHA で使用するために Oracle Server を準備する方法について説明します。

XOsoft リモートインストール ウィザード

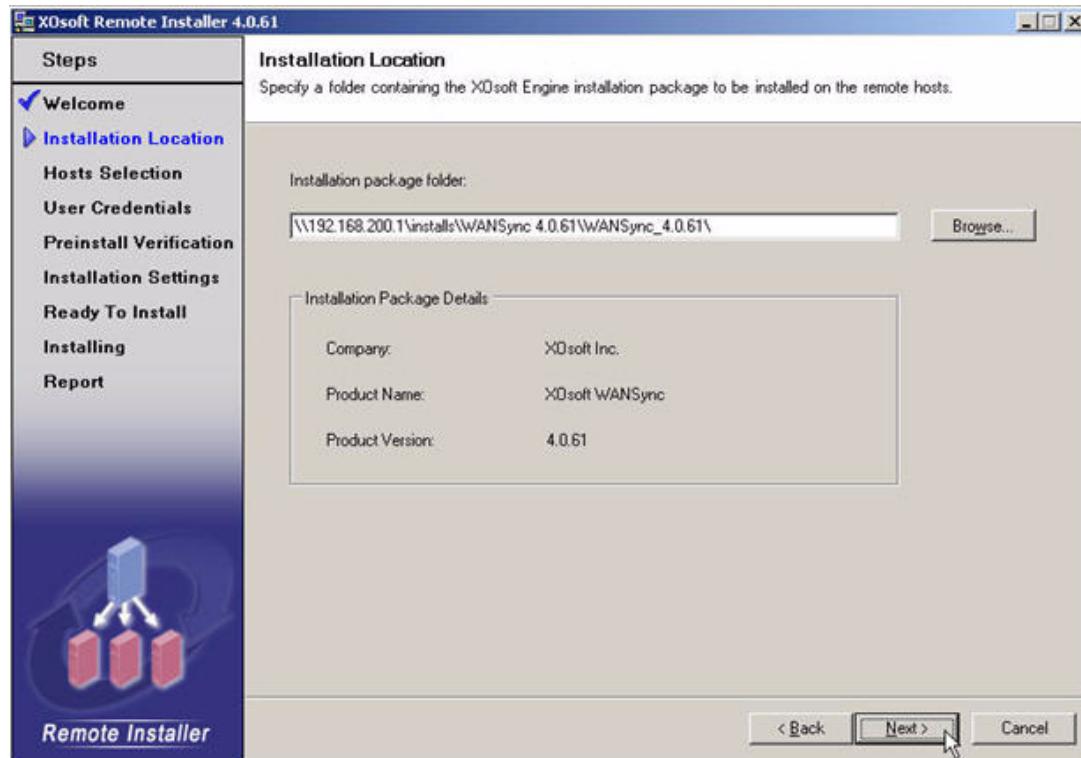
XOsoft リモートインストール ウィザードを使用して、XOsoft エンジンを任意の数のサーバ、またはクラスタノードに一度に展開できます。あるいは、各サーバで `setup.exe` を実行し、手動で XOsoft エンジンをインストールすることもできます。



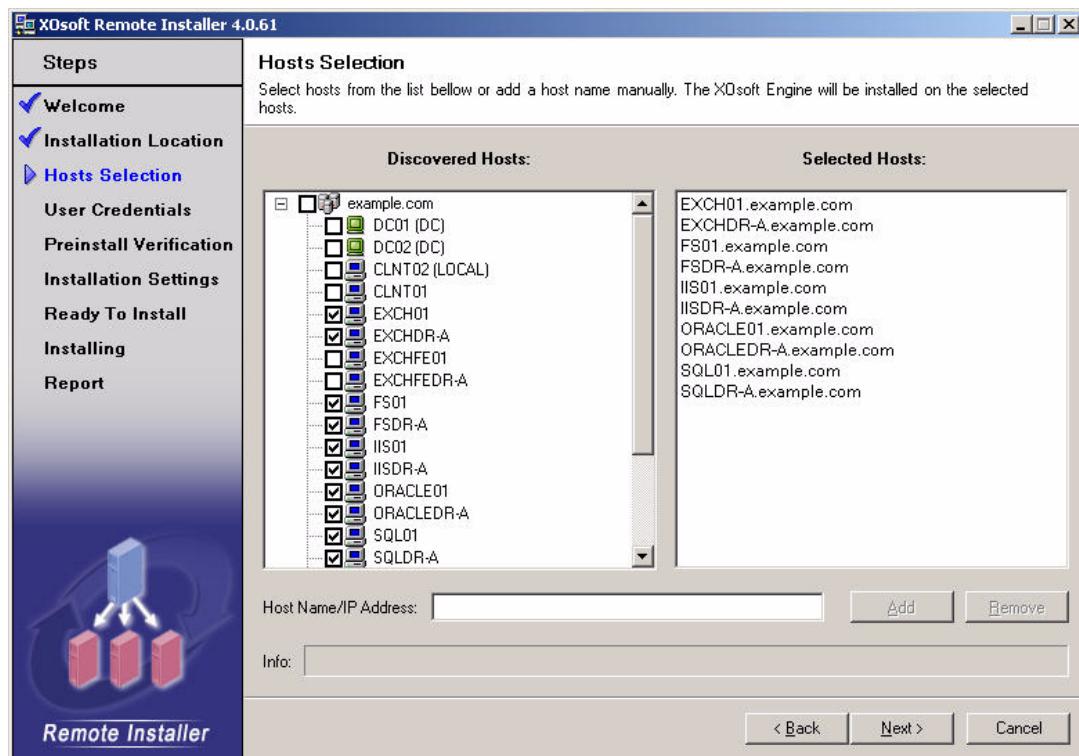
XOsoft リモートインストール ウィザードを使用して、XOsoft エンジンをインストールする場合、「マスター サーバ」と「レプリカ サーバ」の手動インストールセクションの手順をスキップできます。

[Start] メニューまたは [WANSync Manager Tools] メニューから、リモートインストール ウィザードを起動します。XOsoft リモートインストール ウィザードを使用する際には、以下の手順を確認してください。

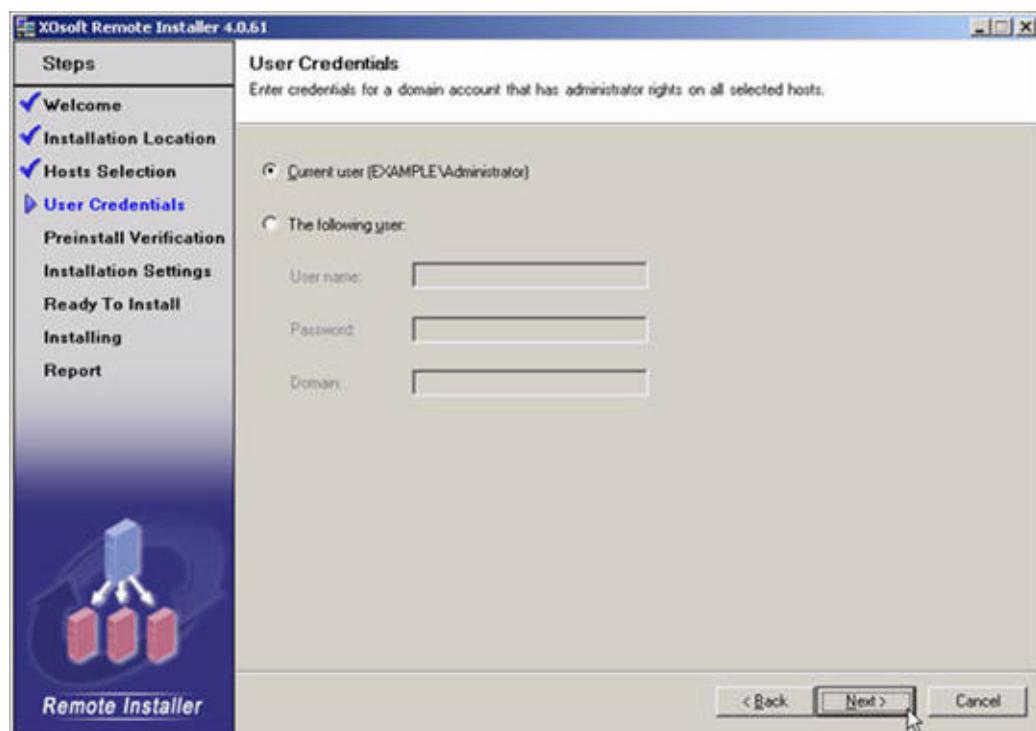
- ◆ **Installation location (インストールの場所)** - パスが正しく、有効な WANSync セットアップ パッケージがあることを確認します。



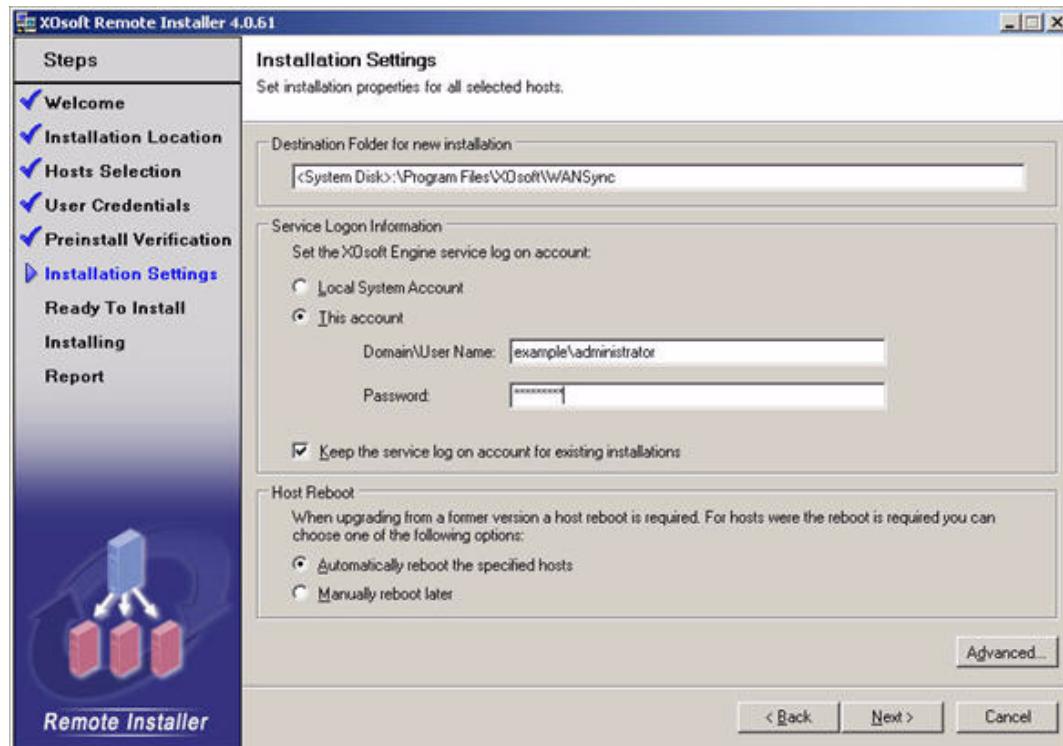
- ◆ **Hosts selection (ホストの選択)** - XOsoft Engine を展開するサーバ（またはクラスタ）ノードを選択します（[Host Name/IP Address] ボックスから手動でサーバを追加することができます）



- ◆ **User credentials (ユーザ認証)** - 各ターゲット サーバへの X0soft Engine のインストールに使用されるユーザ アカウント（このアカウントのユーザがすべてのターゲット マシンにおけるローカル管理者であることを確認してください）。

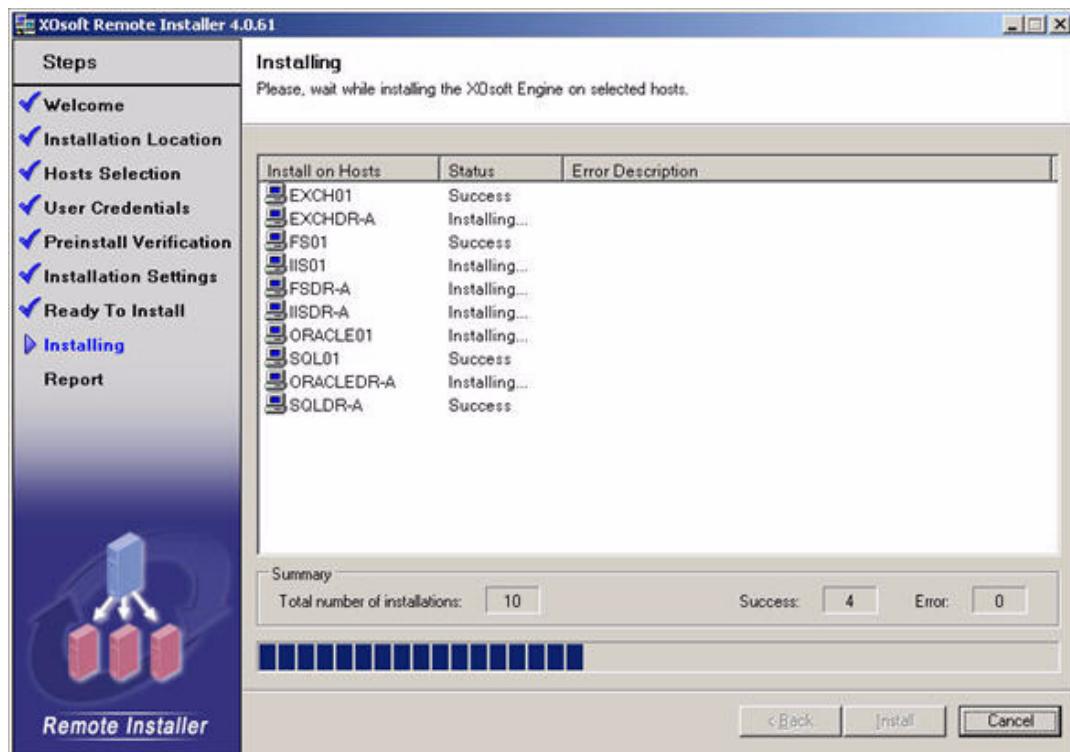


- ◆ **Preinstall verification (インストール前の準備)** - すべてのサーバが正常だと報告されたら [Next] をクリックします
- ◆ **Install settings (インストール設定)** - [This Account] を選択して、WANSync サービスアカウントの domain\username (ドメイン\ユーザ名)、および password (パスワード) を入力します (詳細については、「要件」を参照してください)。

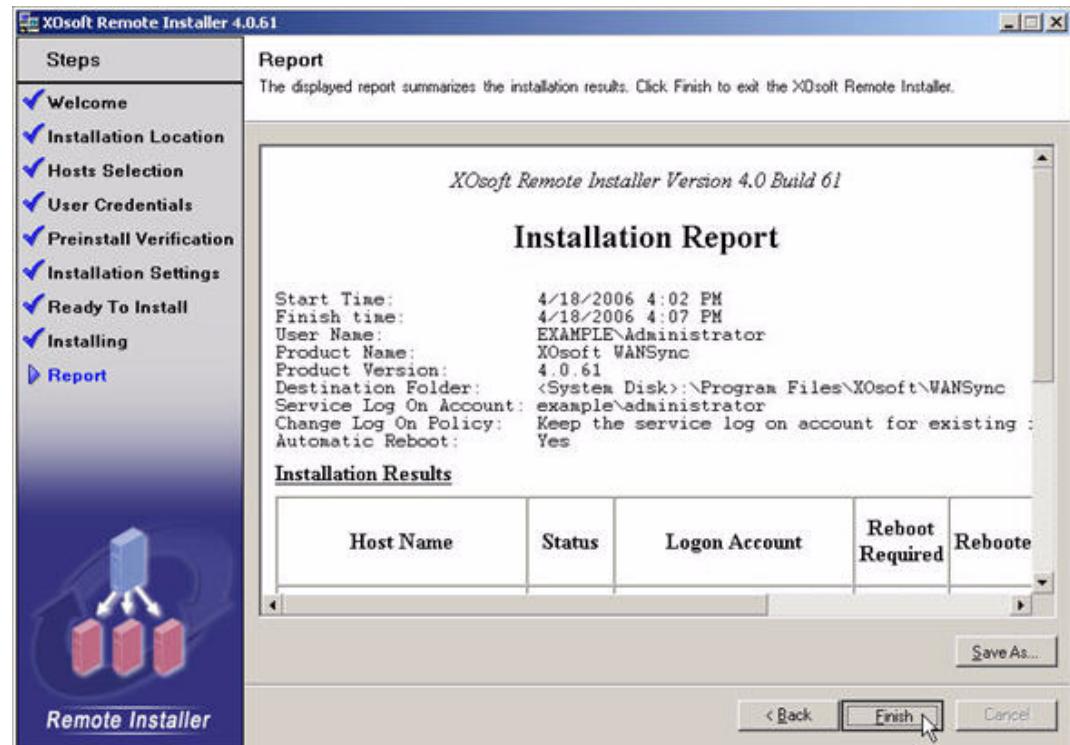


最初に正しいサービスアカウントを設定してから、処理を始めてください (詳細については、「要件」を参照してください)。

- ◆ **Ready to Install (インストール準備完了)** - 必要なすべてのサーバが一覧表示されていることを確認してから、[Install] ボタンをクリックします
- ◆ **Installing (インストール)** - この画面からインストールプロセスをモニタリングできます



- ◆ **Report (レポート)** - この最後のステップでは、インストール レポート全体を表示したり、オプションでそのコピーを保存できます (XoSoft エンジンは既に選択された、すべてのサーバまたはクラスタ ノードにインストールされています)。



マスタ サーバ

- 1 XoSoft リモート インストール ウィザードを使用しなかった場合は、マスタ サーバ上で WANSyncHA のインストールを行ってください。



WANSyncHA Engine をインストールする時は、「要件」の説明に従ってログオン アカウントを使用します。

必須のアカウント以外でインストールしている場合は、Windows サービスを使用していくつでもアカウントを変更できます (XoSoft Engine サービスを探して、ログオン アカウントを変更してください)。次にサービスを再開して、変更を適用します。



- 2 アンチウイルス ソフトウェアをファイル単位でスキャンする設定にしている場合は、WANSyncHA インストール ディレクトリ、Oracle データベース、およびログ ファイルをアンチウイルスの保護から除外します。
- 3 マスタ サーバがクラスタの場合は、すべてのノードに対して手順 1 と 2 を実行します。インストール中に、Oracle グループを切り替える必要はありません。

レプリカ サーバ

- 1 XoSoft リモート インストール ウィザードを使用しなかった場合は、レプリカ サーバに WANSyncHA のインストールを行ってください。



WANSyncHA をインストールする時は、「要件」の説明に従ってログオン アカウントを使用します。

必須のアカウント以外でインストールしている場合は、Windows サービス コンソールを使用していくつでもアカウントを変更できます (XoSoft エンジン サービスを検索して、ログオン アカウントを変更します)。次にサービスを再開して、変更を適用します。

- 2 アンチウイルス ソフトウェアをファイル単位でスキャンする設定にしている場合は、**WANSyncHA** インストールディレクトリ、**Oracle** データベース、およびログ ファイルをアンチウイルスの保護から除外します。
- 3 レプリカ サーバがクラスタの場合は、すべてのノードに対して手順 1 と 2 を実行します。インストール中に、**Oracle** グループを切り替える必要はありません。

レプリケーション シナリオの設定

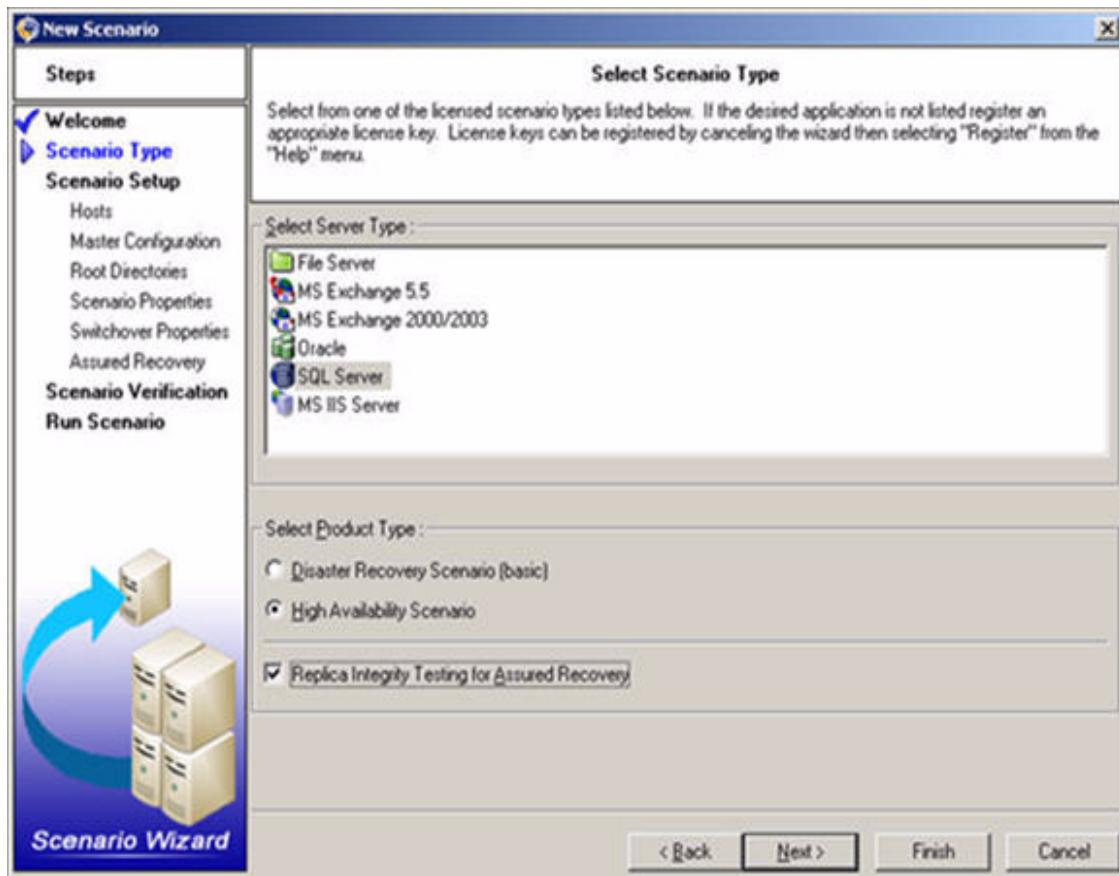
このセクションでは、レプリケーション シナリオの作成および設定方法について説明します。

新規シナリオの作成

- 1 WANSync マネージャを開きます。[File] メニューから [New] を選択するか、[New Scenario] ボタンをクリックします。
- 2 [Welcome] のステップで、[Next] をクリックして、新規シナリオを作成します。
- 3 [Scenario Type] のステップで、[Oracle]、[High Availability Scenario]、およびオプションで [Replica Integrity Test for Assured Recovery] を選択します。

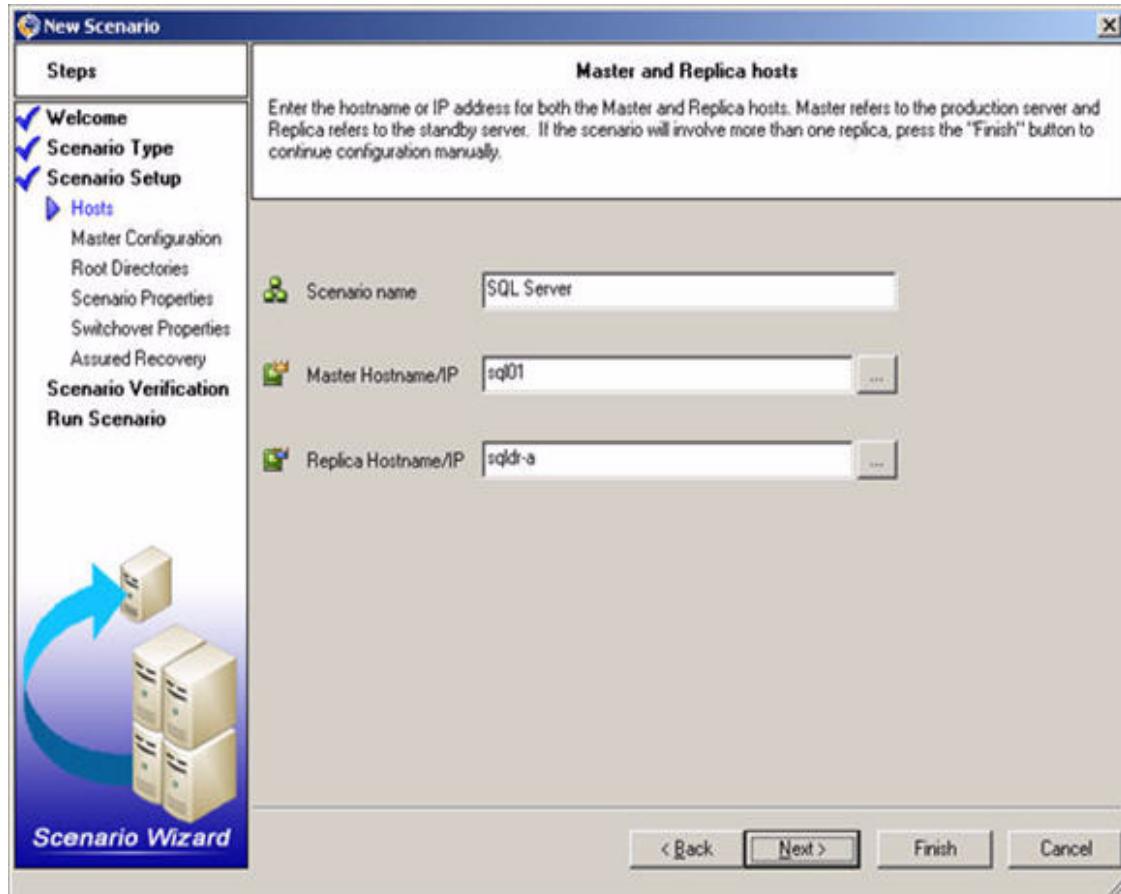


アシュアード リカバリ (回復検証) の詳細、および自動テストによってアシュアード リカバリ (回復検証) を確実なものにする方法については、www.xosoft.com の[Products] メニューにアクセスするか、「WANSync ユーザ ガイド」を参照してください。

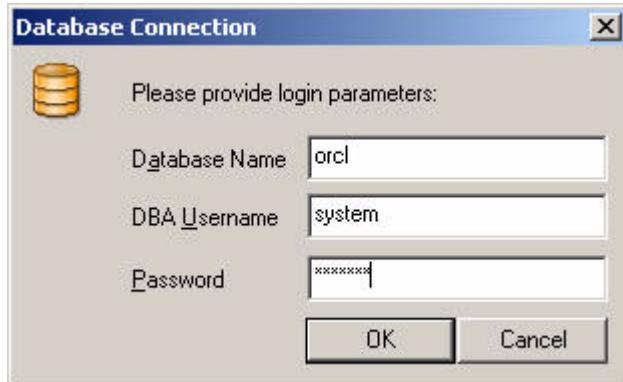


- 4 [Hosts] のステップで、シナリオに名前を付けて、マスター ホストとレプリカ ホストのサーバ名を入力します。

 いざれかのサーバが MSCS クラスタの場合は、Oracle 仮想サーバ名（または IP アドレス）をマスターもしくはレプリカ名に入力します。

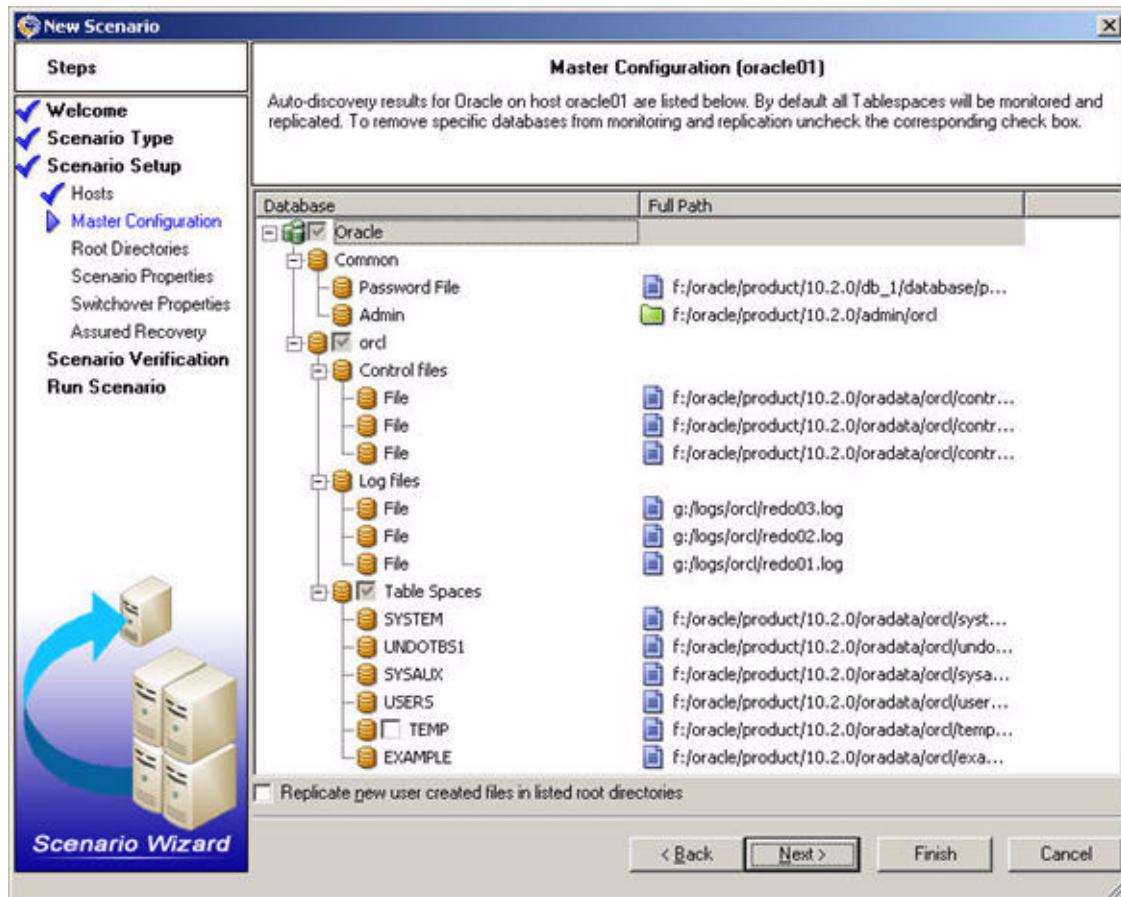


- 5 [Next] ボタンをクリックすると、データベース名と認証の入力を求められます。データベースに対する管理者権限があるアカウントを使用します。WANSyncHA は、このアカウントを使用してマスター サーバの Oracle 設定を照会します。

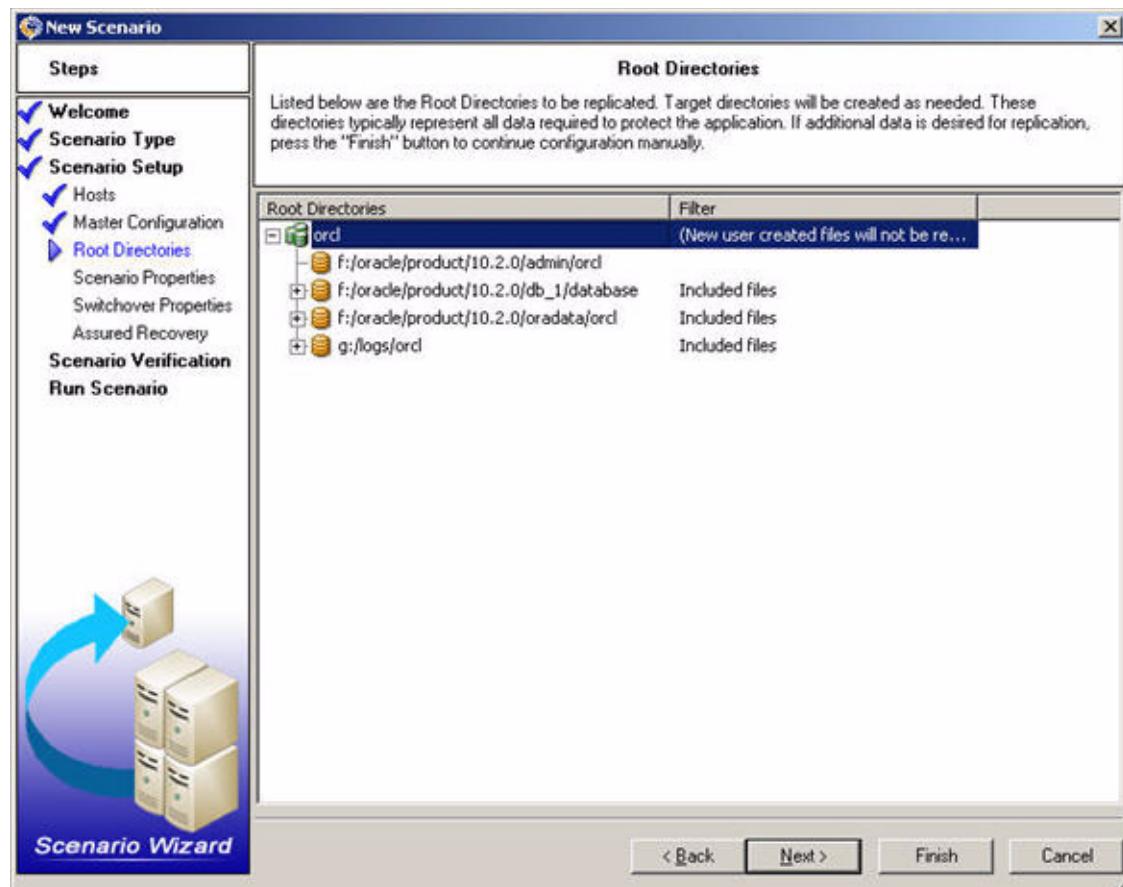


- 6 [Master Configuration] ステップで、マスタ サーバの Oracle データベースが表示されます。これらはレプリケートされ、保護されるデータベースです。

[*replicate new user created files in listed root directories*] をオンにされることをお勧めします。この機能を使用すると、自動検出を再実行しなくても、新しいデータ ファイルを自動的にレプリケーションに追加できます。



- 7 [Root Directories] ステップには、複製されるデータが表示されます。[Next] ボタンをクリックして続行します。

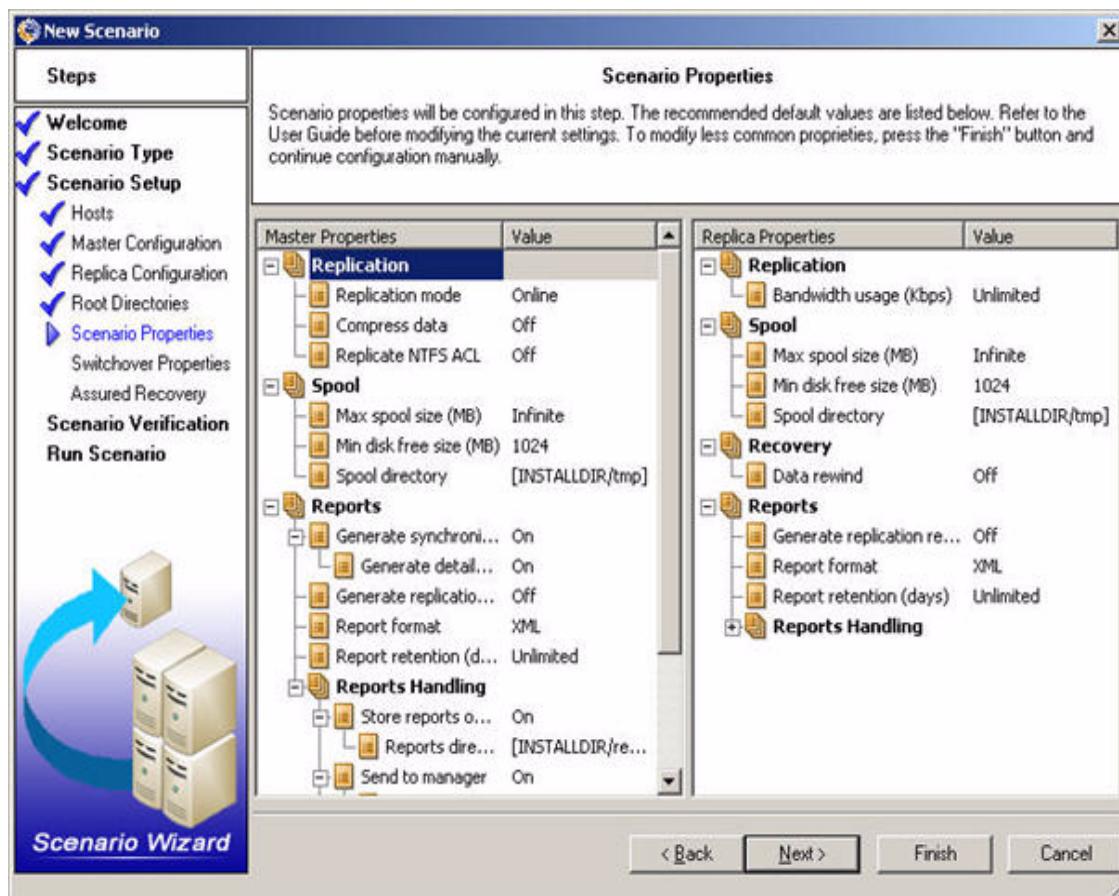


このウィザードの実行後に、複製するファイルまたはフォルダを追加できます。プロンプトの指示に従い後でシナリオを実行し、その後 [Directories] タブに表示されたディレクトリをダブルクリックします。

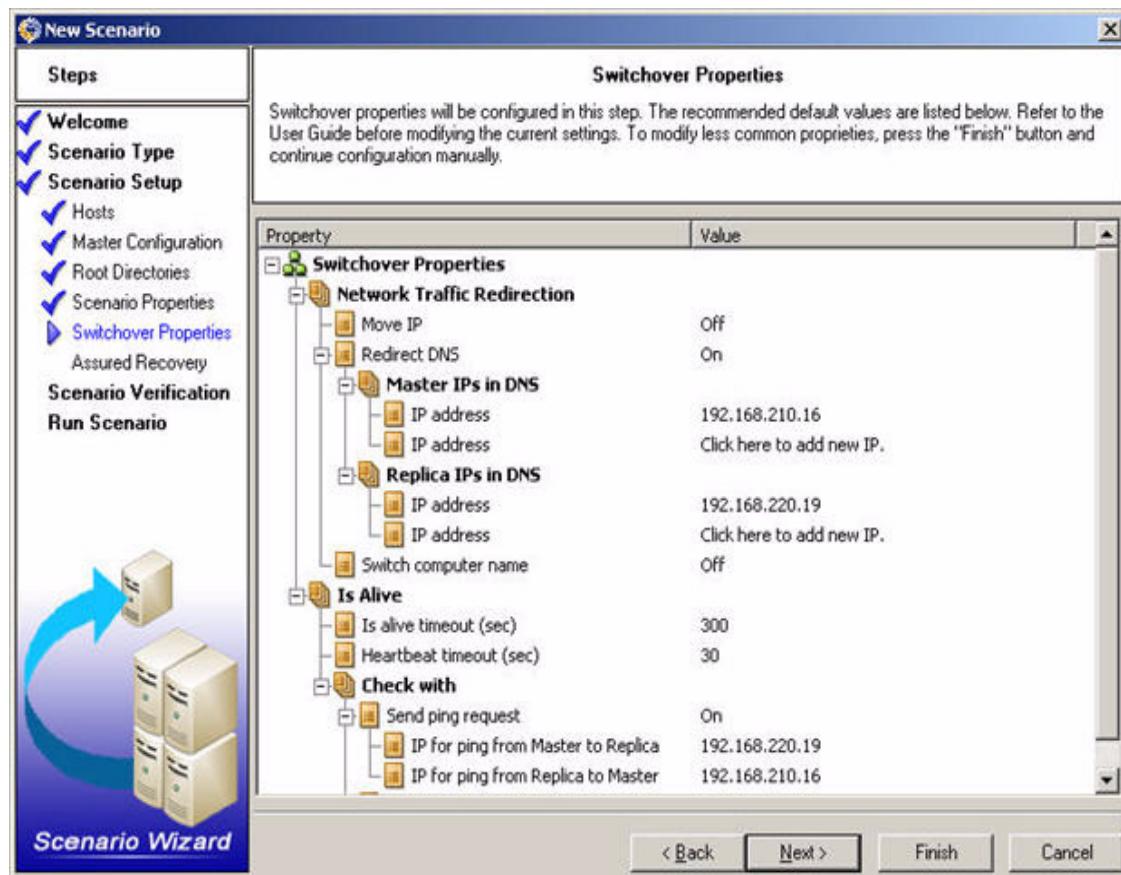
8 [Scenario Properties] のステップでは、追加のプロパティを変更できます。この手順での変更は任意です。準備ができたら [Next] をクリックします。



シナリオ作成後、このペインですべての設定を変更できます。ただし、スプールプロパティ（ここで設定）を変更する前に、「スプールの設定」で環境設定の詳細を確認してください。



- 9 [Switchover Properties] ステップでは、スイッチオーバー パラメータを変更できます。前の手順と同様、変更は任意です。準備ができたら [Next] をクリックします。



自動スイッチオーバーの使用を予定している場合、[Is alive タイムアウト (sec)] の設定により、障害検知後に、スイッチオーバーがトリガされるまでの時間が決まる点に注意してください。

IP 移動をリダイレクション方式として使用する場合は、「IP 移動リダイレクション」を参照してください。

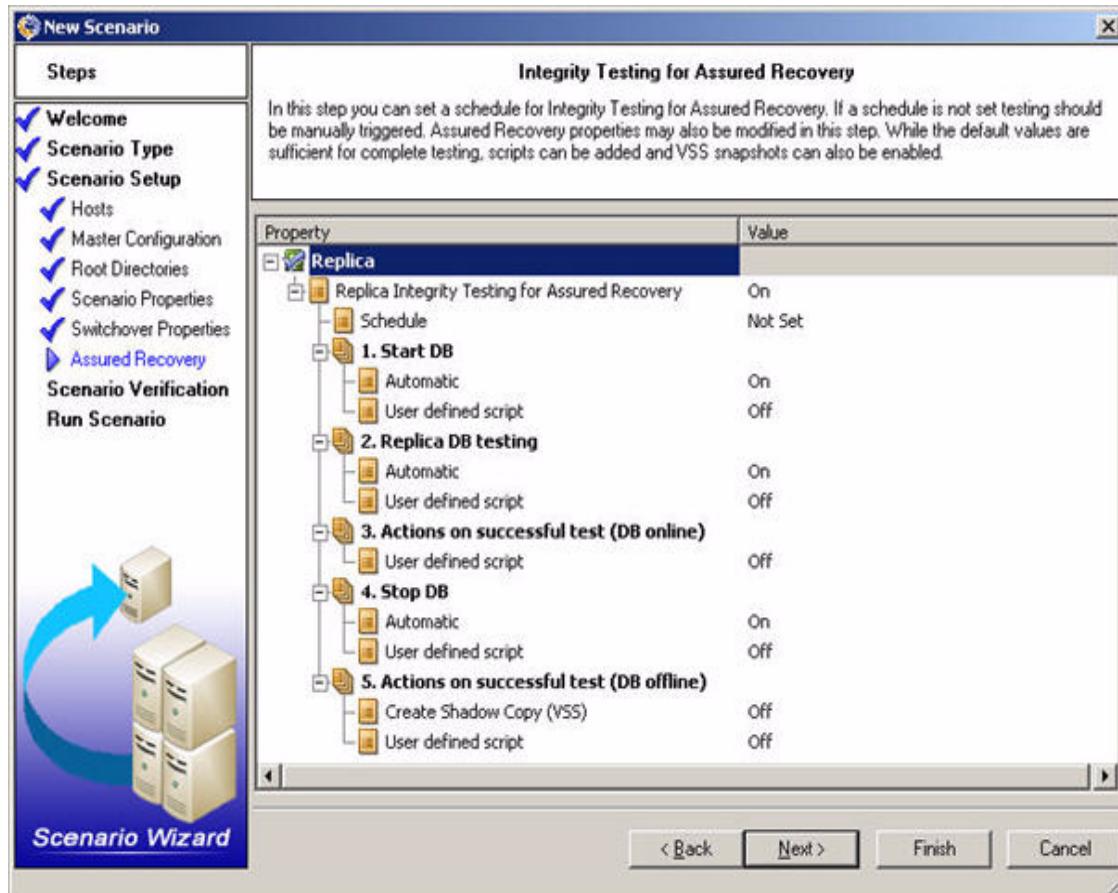
- 10 [Switchover Properties] の最後のステップでは、各ステップが WANSyncHA によって自動的にトリガされるか、または管理者によって手動でトリガされるかを定義します。各オプションに対して希望する設定を選択して、[Next] ボタンをクリックします。

 実運用環境で両方のオプションを自動に設定することはお勧めできません。これらのオプションにはそれぞれ利点がありますが、1つだけを自動に設定することをお勧めします（「自動スイッチオーバー / リバース レプリケーション」を参照）。



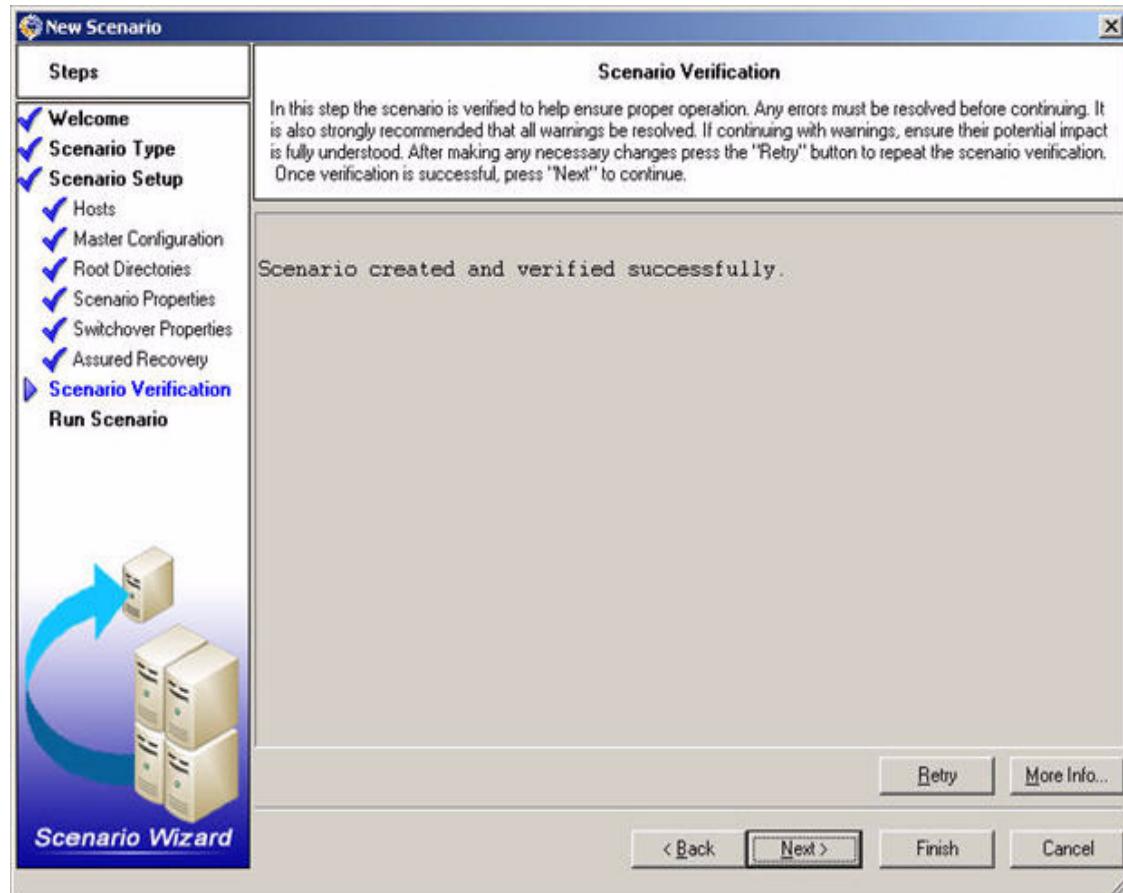
- 11 [Assured Recovery] ステップは、[Scenario Type] ステップでこのオプションを選択した場合のみ表示されます。

 スケジュールされたテストを行う場合は、[Schedule] の Value (値) をダブルクリックします。[Assured Recovery] の時間設定の画面が開き、テストスケジュールを設定できます。



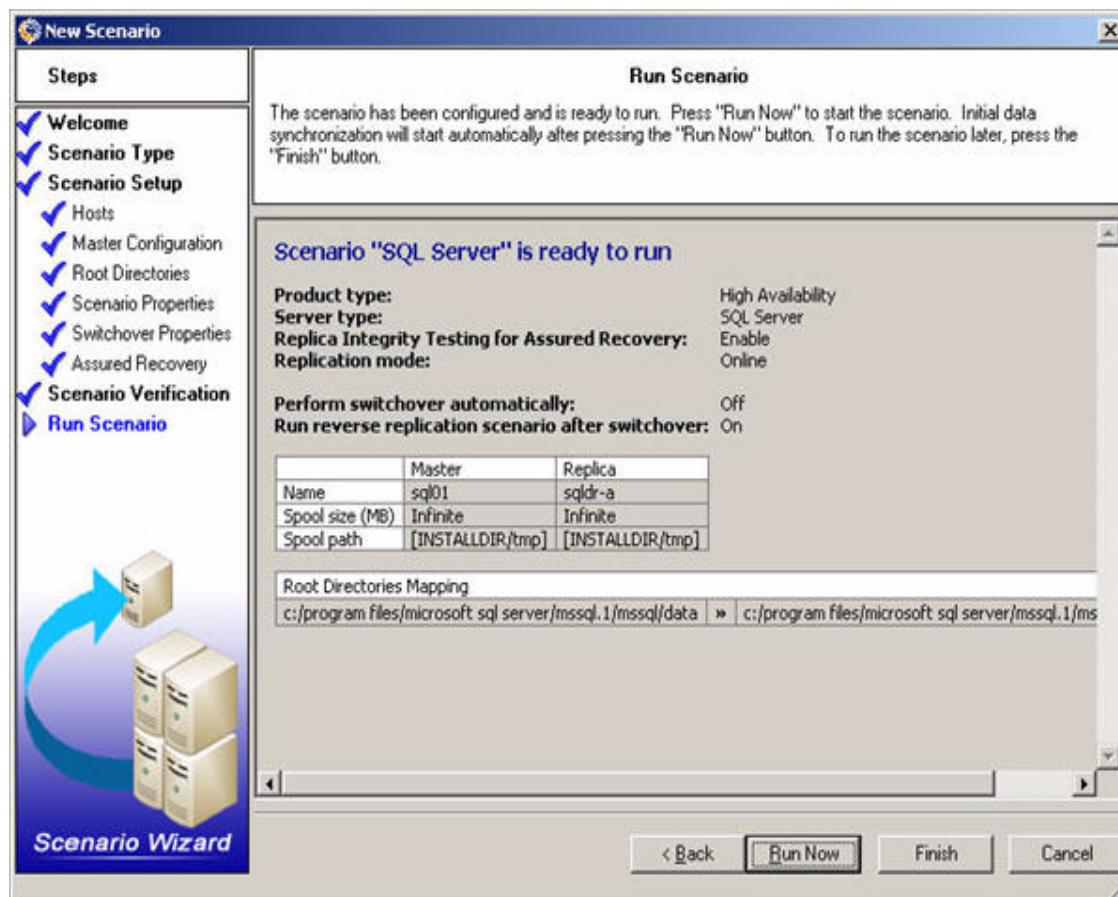
- 12 [Scenario Verification] では、マスター、レプリカ、およびサーバ間の多くの異なるパラメータがチェックされ、スイッチオーバーが正常に確実に終了するようにします。エラーが報告された場合、続行するにはそれらを解決する必要があります。検証を再試行するには、[Retry] ボタンをクリックします。シナリオの検証が正常に終了したら、[Next] をクリックして続行します。

 警告がある状態で続行することもできますが、お勧めできません。警告されている問題をすべて解決してから続行し、アプリケーションが正しく動作するようにしてください。



- 13 これで、シナリオの設定が完了しました。データの同期化を開始する場合は [Run Now] ボタンを、後でシナリオを実行する場合は [Finish] をクリックします。同期化は、データベースのサイズおよびマスターとレプリカ間のネットワーク帯域幅によっては時間がかかることがあります。同期化が完了すると、[Event] ウィンドウに次のメッセージが表示されます：*All modifications during synchronization are replicated.*

この時点で、リアルタイム レプリケーションが使用可能になり、惨事復旧ソリューションがインストールされ有効となります。



ウィザード以外からのシナリオの実行

- 1 [WANSync Manager] ツールバーの [Run] ボタンをクリックするか、[Tools] メニューの [Run] を選択します。
- 2 同期化およびレプリケーションを開始する前に、WANSyncHA によってシナリオの環境設定が検証されます。検証が完了すると、WANSync マネージャに次のメッセージが表示されます: *Are you sure you want to run scenario "scenario_name?"* 上部のペインに検証で発見された警告およびエラー メッセージが表示されます。
- 3 [Scenario Verification] では、マスター サーバおよびレプリカ サーバ間のさまざまなパラメータがチェックされ、スイッチオーバーが正常に確実に終了するようにします。エラーまたは警告が報告された場合、続行するにはそれらを解決する必要があります。



- 3 [OK] をクリックして、シナリオを実行します。以下の画面が表示されます。



- 4 ダイアログ ボックス内の設定は、[Block Synchronization] 方式が選択され、[Ignore Same Size/time Files] オプションがオフになっている、デフォルト状態のままにします。
- 5 [Synchronize] ボタンをクリックします。同期化は、データベースのサイズおよびマスターとレプリカ間のネットワーク帯域幅によっては時間がかかることがあります。同期化が完了すると、[Event] ウィンドウに次のメッセージが表示されます: *All modifications during synchronization are replicated.*

この時点で、リアルタイム レプリケーションが使用可能になり、高可用性ソリューションがインストールされ有効となります。



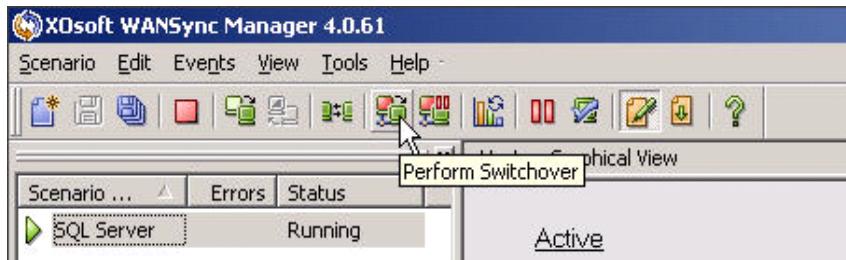
スイッチオーバーとスイッチバック 3

同

期化が完了すると、スイッチオーバーおよびスイッチバックを開始できます。

スイッチオーバー

- 1 WANSync マネージャを開いて、目的のシナリオを選択します。
- 2 [Perform Switchover] ボタンをクリックするか、[Tools] メニューから [Perform Switchover] を選択します。

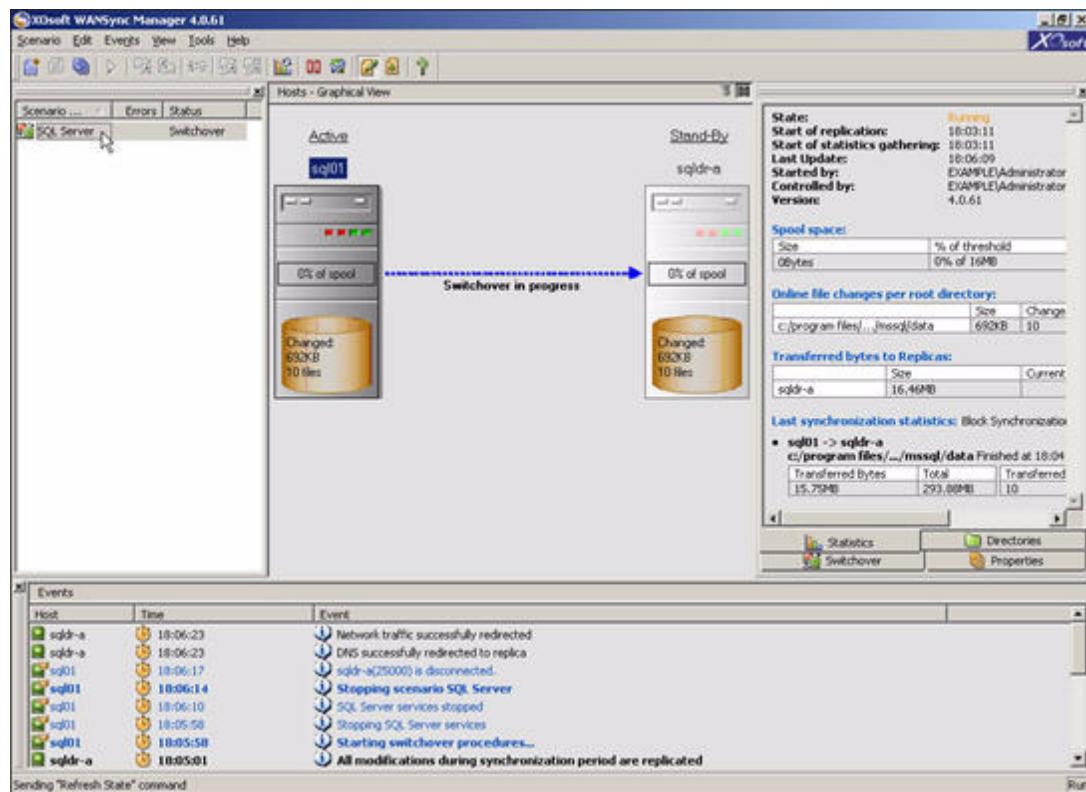


- 3 [Perform Switchover confirmation] ウィンドウで [OK] をクリックします。

この手順で、マスター サーバからレプリカ サーバへのスイッチオーバーが開始されます。スイッチオーバー プロセスについての詳細な情報は、スイッチオーバー中 [Events] ペインに表示されます。



スイッチオーバーが完了すると、シナリオが停止します。自動リバース レプリケーションがオンになっている場合、スイッチオーバー終了後もシナリオが停止しないことがあります。詳細については、「自動スイッチオーバー / リバース レプリケーション」を参照してください。



スイッチバック

- 1 ネットワーク上でマスター サーバおよびレプリカ サーバが使用可能であること、および WANSync サービス (XOsoft エンジン) が稼働中であることを確認します。
- 2 WANSync マネージャから、目的のシナリオを選択します。
- 3 バックワードシナリオがすでに実行中の場合は、この手順をスキップします。バックワードシナリオが実行中でない場合は、[Run] を選択してシナリオを開始します。WANSyncHA によってスイッチオーバーの発生が検出され、バックワードシナリオが実行中であることが表示されます。
- 4 再同期化が必要である場合には、再同期化が完了するまでお待ちください。[Event] ウィンドウに次のメッセージが表示されます：*All modifications during synchronization are replicated.*
- 5 [Perform Switchover] ボタンをクリックするか、[Tools] メニューから [Perform Switchover] を選択し、次に [Perform Switchover confirmation] ウィンドウで [OK] をクリックします。

スイッチバック完了後、シナリオを元（フォワード）の状態で再度実行できます。スイッチオーバーが正常に終了した後、再同期化が自動的に開始されないようにするには、[Run Reverse Replication Scenario Automatically] オプションを使用します（「自動スイッチオーバー / リバース レプリケーション」を参照）。



WANSYNCHA のヒント



この章では、アプリケーションに関する情報について説明します。

スプールの設定

WANSynchA スプールは、変更データをリアルタイムで転送するための帯域幅が十分でない場合に、複製される変更データがバックアップ（つまり、スプール）されるディスク上のフォルダです。データは、一時的なネットワークの切断、ネットワークのコリジョン、または単純にネットワーク帯域幅がサーバ上で変更されたデータを転送するために十分でない場合にスプールされます。

帯域幅が使用可能になるまで変更データを一時保管するのに加えて、スプール領域は通常の同期化プロセスの一部としても使用されます。そのため、同期中に一定のスプールが蓄積されるのは異常ではありません。

WANSynchA スプール フォルダは、専用ボリュームまたはブート / システム ボリュームなど比較的使用率の低いドライブに配置してください。頻繁にアクセスされるシステム（OS）、ユーザー、またはアプリケーション データを含むボリュームには配置しないでください。例としては、データベース、共有ファイル、またはシステム ページファイルを含むボリュームがあります。デフォルトでは、スプール フォルダは **WANSync** インストール ディレクトリの `tmp` フォルダ内にあります。マスタおよびレプリカの `[properties]` タブ上、または `[New Scenario]` ウィザードで設定するスプール パラメータで、スプールで使用可能なディスク容量を決定します。ほとんどの場合、デフォルト値で問題ありません。この値を変更する場合は、レプリカを行うデータ サイズ合計の少なくとも 10% 以上にする必要があります。たとえば、サーバ上にある 50GB のデータを複製する場合、少なくとも 5GB のスペースをスプール用に確保する必要があります。このスペースは事前割り当てはされません。



スプールの場所を変更する場合は、変更したパスをファイル単位のアンチウイルス スキャン（スケジュール スキャンとリアルタイム スキャン）対象から外してください。

高帯域幅の WAN 回線用の **WANSync** 調整

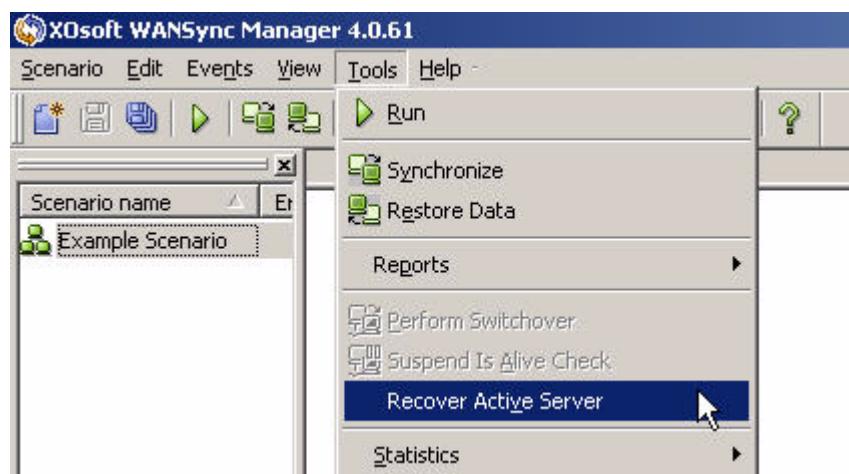
WAN でデータを複製する際には、リンクの待ち時間（ミリ秒単位で報告される `ping` 時間）が、実際に使用される帯域幅に影響します。待ち時間による影響で、使用できる帯域幅のごく一部しか実際に使用できないことがあります。WAN 環境で **WANSynchA** を使用する際には、TCP セッションの **TCP Window Size (RWIN)** を調整することで回線の遅延を補います。TCP Window Size (RWIN) を調整することで、**WANSync** は WAN 回線を適切に使用します。通常、**WANSynchA** 内の TCP ウィンドウ サイズは、最大 10M ビットまでの WAN リンク用に調整されています。WAN 回線が 10M ビットを超えており、または遅延が非常に大きい場合は、**WANSynchA** 内の TCP Window Size (RWIN) を適切に調整する方法を確認してください。OS 自身の TCP Window Size (RWIN) を変更すると他のアプリケーションに影響が出る場合があります。TCP Window Size (RWIN) は、**WANSynchA** 側のみ調整してください。

アクティブサーバのリカバリ

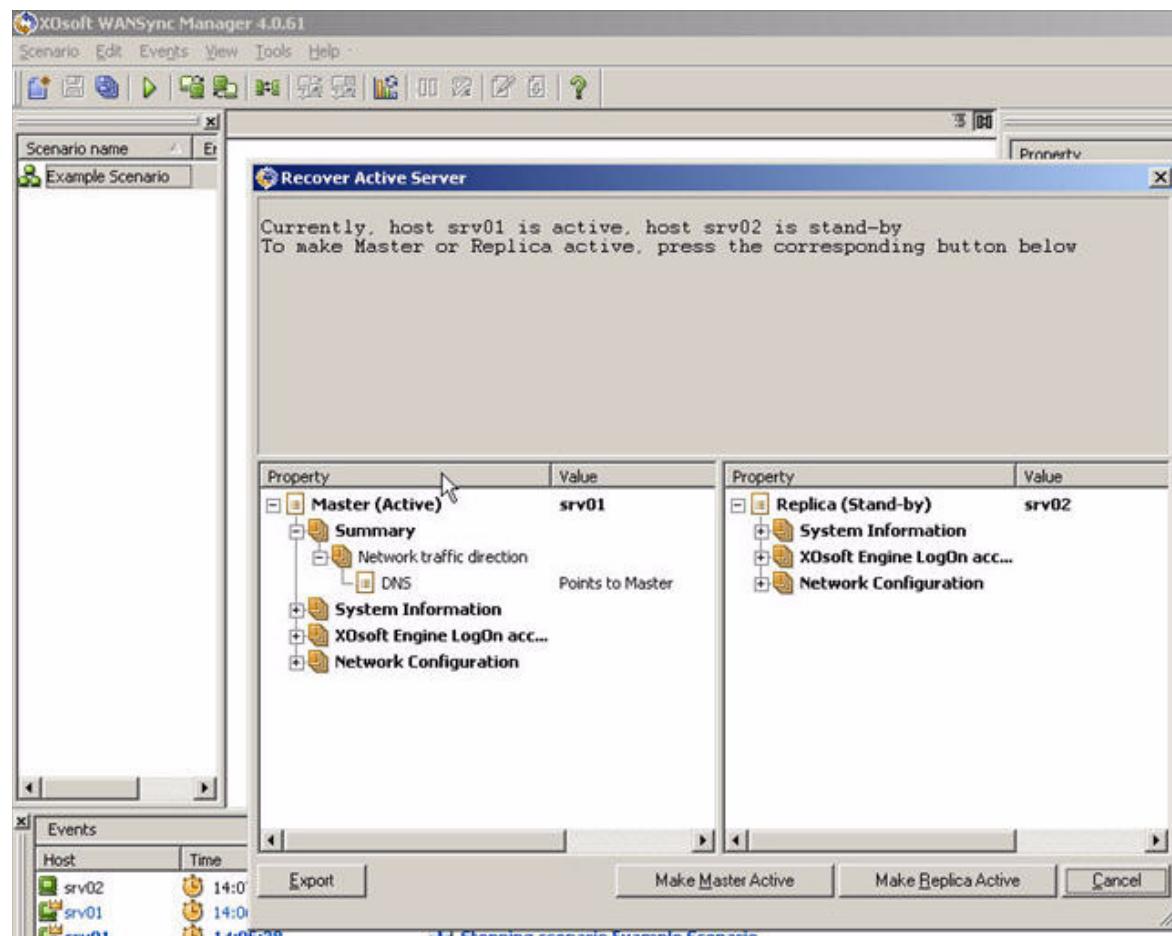
状況によっては、データ同期化プロセスを完了させずに、マスター サーバまたはレプリカ サーバを強制的にアクティブ サーバにする必要が生じことがあります。たとえば、スイッチオーバーは発生したものの、レプリカ サーバ上のデータが変更されていない場合などです。この場合、マスター サーバ上には、より新しいデータがある可能性があり、レプリカからマスター サーバへのデータの同期化は望ましくありません。WANSync では、このオプションを可能にするために、「Recover Active Server (アクティブ サーバのリカバリ)」というプロセスを使用します。このオプションを使用するには、シナリオが停止していることを確認して、[Tools] メニューで [Recover Active Server] を選択します。



このオプションは多くの場合正しい選択となりますが、使用には注意してください。不適切に使用すると、データが失われることがあります。WANSync では通常、すべてのデータが同期化されるまで、ホストから他のホストへのスイッチオーバーは認められません。このように設計されているのは、ユーザが古いデータセットにリダイレクトされ、そのデータセットがそれよりも新しい可能性のあるデータを上書きしてしまうことを避けるためです。「Recover Active Server」を使用すると、どのサーバに正しいデータセットがあるかに関わらず、ユーザは強制的にいずれかのサーバにリダイレクトされます。そのため、管理者はアクティブにするサーバに最も新しいデータセットがあることを手動で確認する必要があります。



「Recover Active Server」は、スイッチ コンピュータ名リダイレクション方式を使用している場合には、使用できません。



強制的にアクティブにするサーバに応じて、[Make Master Active] または [Make Replica Active] を選択します。



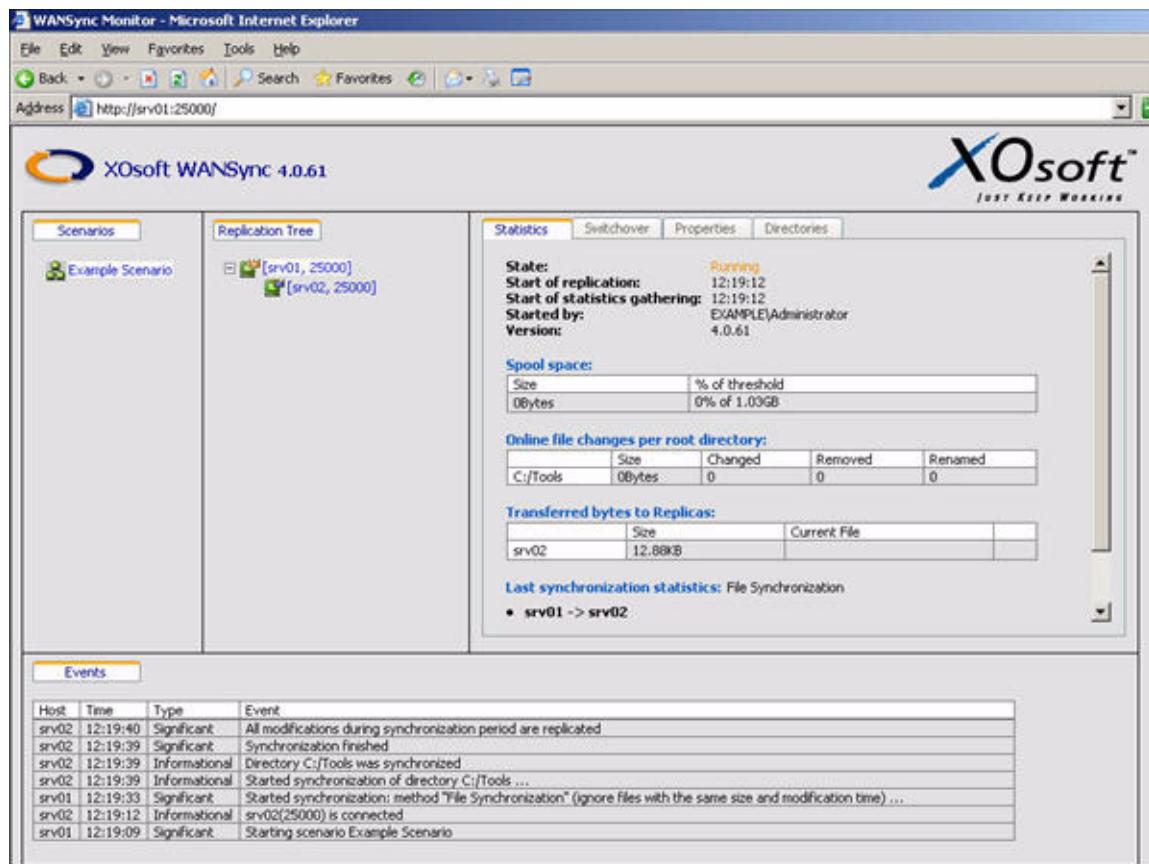
惨事発生時の正規のスイッচオーバーで、ユーザが一定期間レプリカ サーバにリダイレクトされた場合には、マスタ サーバをアクティブにする前に、レプリカ サーバでのすべての変更をマスタにレプリケートする必要があります。このような状況で [Recover Active Server] を使用すると、データが失われます。

読み取り専用 Web GUI

WANSync マネージャは、同一の 管理アカウントを使用し、複数起動することはできません。現在のユーザの為に GUI はロックされ、同時に使用できないようになります。これは競合を防ぐために必要です。複数の管理者が同時にモニタリングできるようにするために、WANSync には読み取り専用 Web GUI も用意されています。

- 1 Web GUI にアクセスするには、ブラウザで <http://<マスタ サーバ名>:25000> を開きます。
- 2 マスタ サーバに管理権限のあるユーザ アカウントとパスワードを入力します。





ブラウザを更新する必要はありません。GUI は自動的に更新されます。このウィンドウからすべてのパラメータ、統計情報、およびイベントをモニタリングできます。



付録 A WANSyncHA のヒント

自動スイッチオーバー / リバース レプリケーション

B

こ

の章では、自動（トリガによる）スイッチオーバー プロセスと自動リバース レプリケーション プロセスについて説明します。

自動スイッチオーバー

トリガによる（自動）スイッチオーバーは、管理者が実行する手動スイッチオーバーと常に同じです。自動スイッチオーバーは、管理者が [Perform Switchover] ボタンをクリックして、手動でスイッチオーバーを開始するのではなく、マスタ サーバのリソースの障害によってトリガされます。サーバの ping 応答、アプリケーション サービスのステータス、およびデータベースの接続性がモニタリングされます。タイムアウト パラメータは変更できます。詳細については、「WANSync ユーザ ガイド」を参照してください。

自動リバース レプリケーション

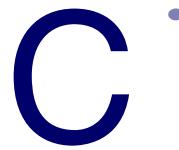
この機能をオフにしている場合、スイッチオーバー発生後にリバース レプリケーションを開始するには、[Run] ボタンをクリックします。この機能の利点は、マスタ サーバとレプリカ サーバがオンライン状態にあり、スイッチオーバーの間も接続されていた場合、リバース方向での再同期化の必要がない点です。再同期化では、マスタ サーバとレプリカ サーバのデータの比較が行われ、リアルタイム レプリケーションの開始前に、どちらの変更データを転送するかが決められます。この処理には時間がかかります。ただし、自動リバース レプリケーションがオンになっており、スイッチオーバーの間も両方のサーバがオンラインだった場合、再同期化が行われずにレプリケーションがリバースされます。これが、再同期化が必要でない状況の 1 つです。

推奨事項

実運用環境では、この両方のオプションを自動に設定することはお勧めできません。これらのオプションにはそれぞれ利点がありますが、いずれか 1 つのみを自動に設定することをお勧めします。その理由は、自動スイッチオーバーでは障害が検出されると、管理者が知らないうちに WANSyncHA がスイッチオーバーをトリガできるためです。自動リバース レプリケーションもオンになっている場合、管理者が障害の状況を把握する前に、WANSyncHA によって障害の発生した実運用サーバのデータの上書きが開始されることがあります。管理者が障害状況を把握できる前に、障害の発生したサーバのデータが上書きされると、望ましくない結果が生じことがあります。このような可能性があるため、両方のオプションを自動に設定することはお勧めできません。お客様の要件に合わせて、いずれか 1 つのオプションを選択してください。一度に 1 つのオプションのみ使用することで、これらの設定の利点を得られ、安全に使用できます。



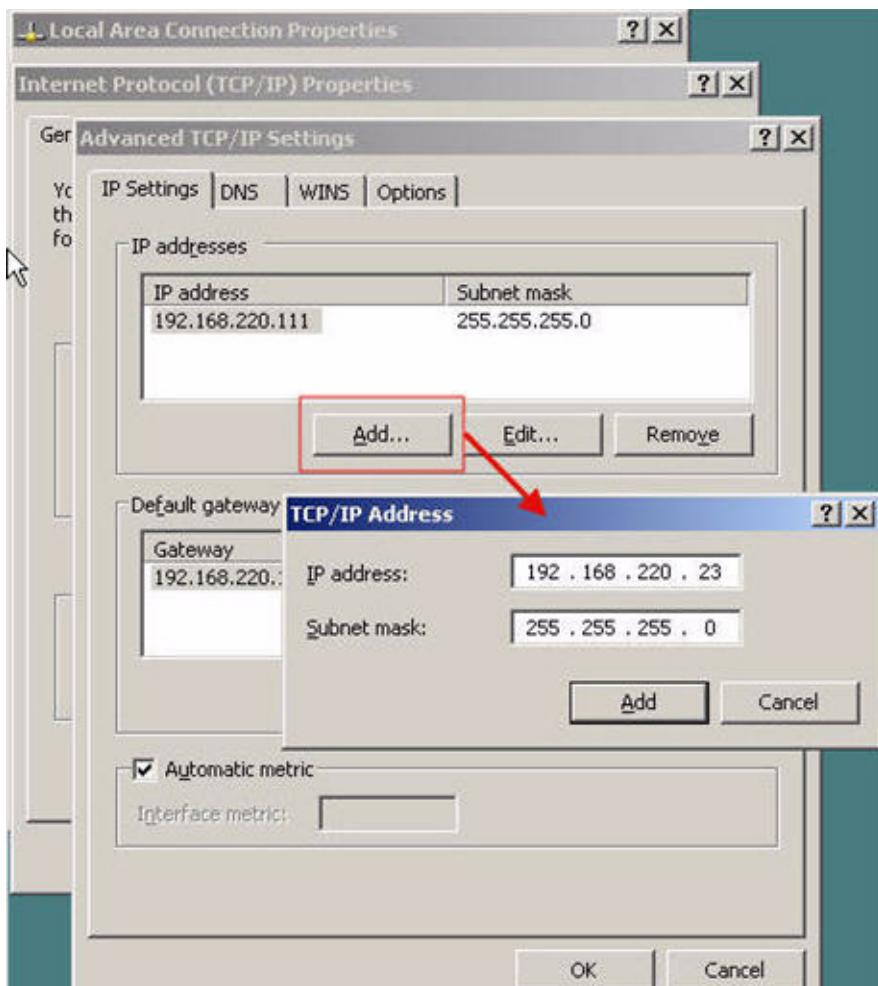
IP 移動リダイレクション



このセクションでは、高可用性シナリオに IP 移動リダイレクションを追加するために必要な手順について説明します。この方式は、両方のサーバが同じ IP サブネットにある場合のみ使用できます。

マスタ サーバでの IP 移動

シナリオの設定をする前に、IP アドレスをマスタ ホストに追加します(以下の手順では「WS-IP」と記載します)。シナリオの設定をすでに終えている場合でも、そのままこの IP アドレスを追加します。この場合の手順は以下に示してあります。この新しい IP アドレスは、WANSync 内部の通信およびレプリケーションに使用されます。これは、スイッチオーバー(レプリカ サーバにスイッチ)後、現在の実運用 IP アドレスがマスタで使用できなくなるために必要になります。以下のスクリーン ショットでは、WS-IP IP アドレスは 192.168.220.23、現在の実運用サーバの IP アドレスは 192.268.220.111 です。

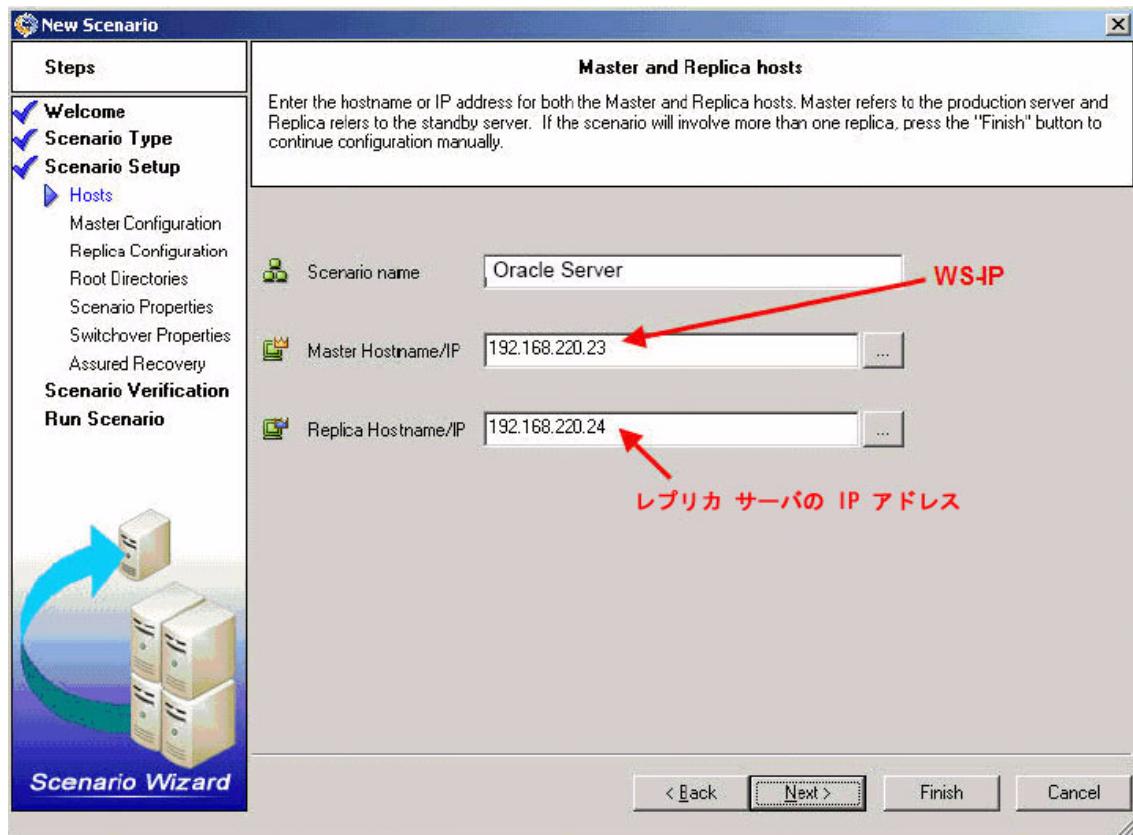


WANSync マネージャでの IP 移動

このセクションでは、WANSync マネージャでの IP 移動リダイレクションについて説明します。

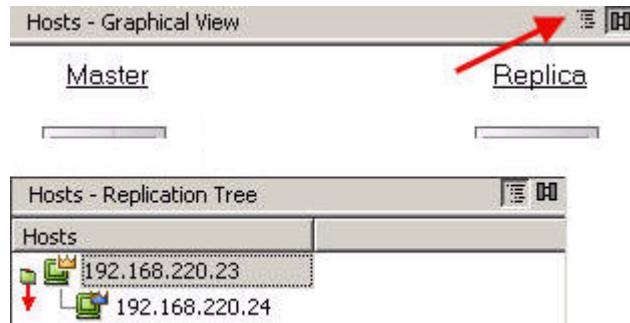
新しいシナリオの場合

ウィザードの初期実行時に、サーバ名の代わりに、WS-IP アドレスとレプリカ IP アドレスを入力します。

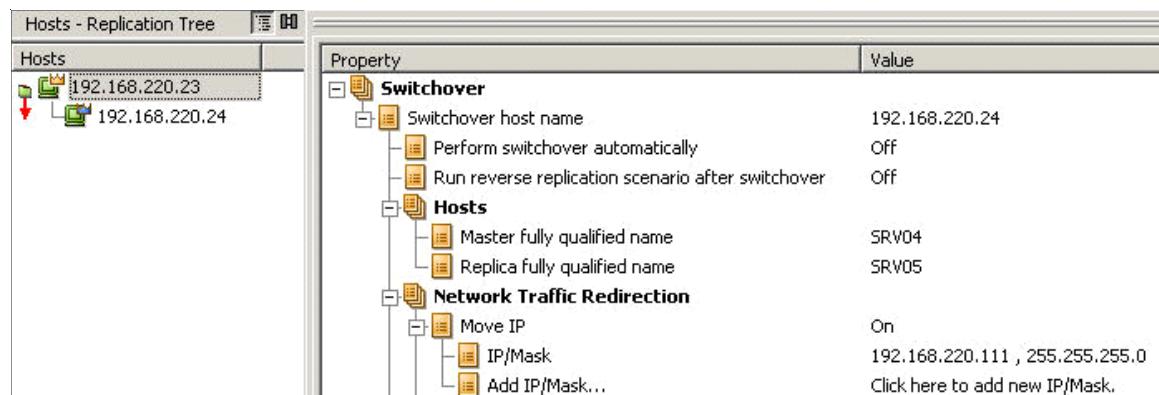


既存のシナリオの場合

- 1 [Hosts] ペインが [Graphical View] の場合は、ペインの右上隅にある左側のボタンをクリックして、[Replication Tree] ビューに切り替えます。



- 2 マスター ホスト名を右クリックして、[Rename] を選択します。次に、WS-IP アドレスを入力します。
- 3 [Switchover] タブを選択して、レプリカ サーバをスイッチャーボード ホストとして選択します。
- 4 [Move IP] オプションを On に設定します。[Move IP] - [IP/Mask] に示される IP アドレスが実運用サーバの IP アドレス（これがスイッチャーボードする IP アドレスです）と一致していることを確認します。複数の IP アドレスを移動する場合は、[Click here to add new IP/Mask] を選択して複数の実運用 IP アドレスを追加できます。



マスタ クラスタでのクラスタ IP 移動

クラスタ化されたマスタ（共有ストレージ付きの MSCS）で IP 移動リダイレクションを使用するには、マスタ サーバ SQL リソース グループに IP リソースを追加する必要があります。このセクションでは、マスタ クラスタからシングル サーバ レプリカへの IP 移動リダイレクションについて説明します。



マスターおよびレプリカがクラスタの場合は、このマニュアルには記載されていない IP 移動リダイレクションプロセスに関する特別な環境設定の問題があります。クラスタ間シナリオの場合は、DNS リダイレクトを使用するか、テクニカルサポートに連絡して詳細な指示を受けてください。

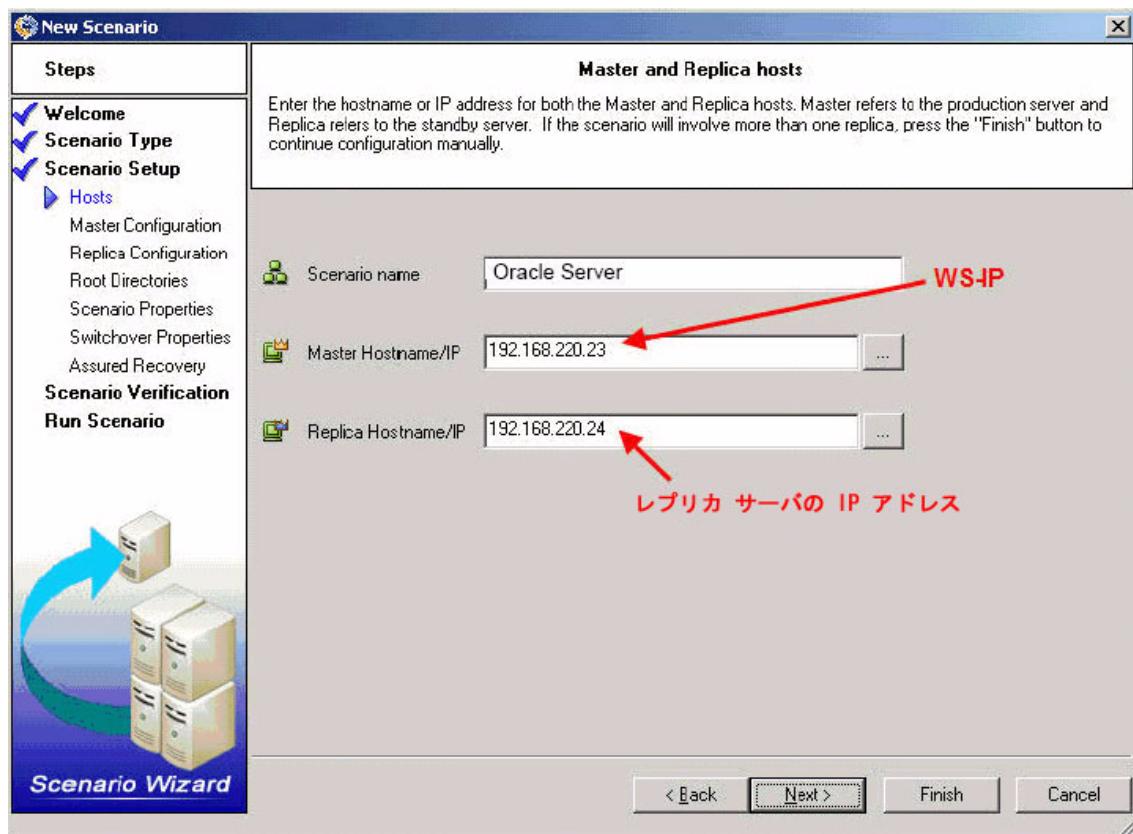
- 1 クラスタ アドミニストレータを開きます。
 - 2 マスタ クラスタの Oracle リソース グループで、新しい IP リソースを作成して、「*WS-IP*」と名付けます。
 - 3 このリソースをオンラインにして、`ping` コマンドを発行してレプリカから認識できることを確認します。この新しい IP アドレスは、*WANSyncHA* 内部の通信およびレプリケーションに使用されます。これは、スイッチオーバー（レプリカ サーバにスイッチ）後、現在の実運用 IP アドレスがマスタで使用できなくなるために必要になります。

WANSync マネージャでのクラスタ IP 移動

このセクションでは、WANSync マネージャでのクラスタ IP 移動リダイレクションについて説明します。

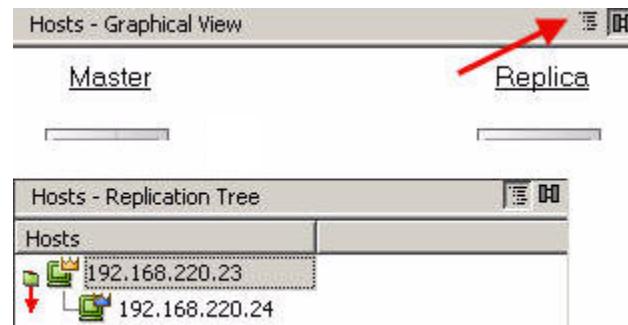
新しいシナリオの場合

ウィザードの初期実行時に、クラスタ仮想サーバ名の代わりに、WS-IP アドレスとレプリカ IP アドレスを入力します。

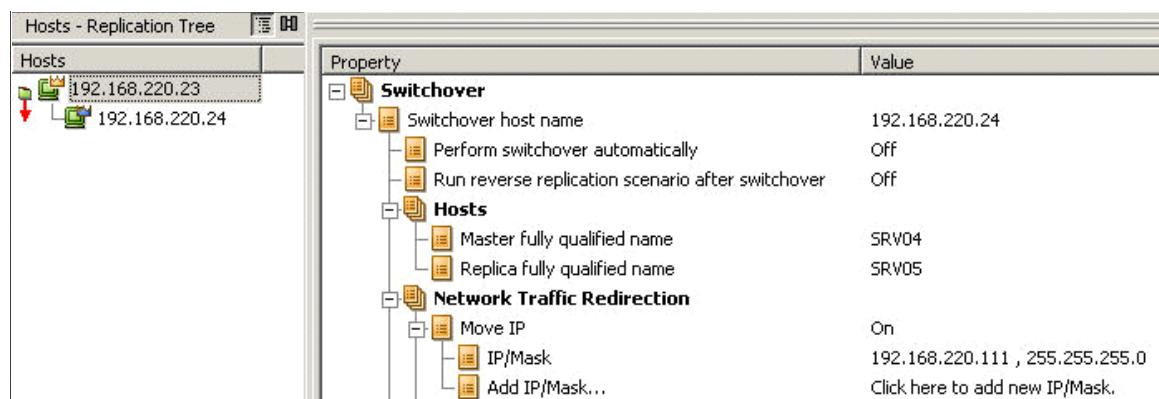


既存のシナリオの場合

- 1 [Hosts] ペインが [Graphical View] の場合は、ペインの右上隅にある左側のボタンをクリックして、[Replication Tree] ビューに切り替えます。



- 2 マスター ホスト名を右クリックして、[Rename] を選択します。次に、WS-IP アドレスを入力します。
- 3 [Switchover] タブを選択して、レプリカ サーバをスイッチャーボード ホストとして選択します。
- 4 [Move IP] オプションを On に設定します。[Move IP] - [IP/Mask] に示される IP アドレスが実運用サーバの IP アドレス（これがスイッチャーボードする IP アドレスです）と一致していることを確認します。複数の IP アドレスを移動する場合は、[Click here to add new IP/Mask] を選択して複数の実運用 IP アドレスを追加できます。



索引

D

DNS リダイレクト 3

I

install 9, 10

installation 8

IP 移動 3, 39

 マスター サーバ 39

IP 移動リダイレクション 39

W

WANSync マネージャ 4, 5, 7, 8, 14, 25, 27, 28

WANSync マネージャのインストール 7

WANSyncHA コンポーネント 5

WansyncHA のヒント 31

Web GUI 34

あ

アクティブ サーバのリカバリ 32

アクティブ サーバ、リカバリ 32

アシュアードリカバリ (回復検証) 14, 22

い

移動

 IP

 リダイレクション 39

インストール 3, 7, 8, 10, 11, 12, 13

 ソフト 3

インストール ウィザード 7, 8, 12

インストール、非侵入性 3

う

ウィザード

 インストール 5, 7, 8, 12, 25

 ウィザード以外からのシナリオの実行 25

か

環境設定 5, 14, 19

管理権限 34

関連マニュアル 1

く

クラスタ 4

 クラスタ IP 移動 42

 WANSync マネージャ 43

 マスター クラスタ 42

こ

高可用性 14, 25

さ

サーバ 5, 7, 8, 9, 12, 13, 15, 16, 28, 37

 セットアップ 7

 マスター 25

サーバのセットアップ 7

サーバ、準備 8

し

自動スイッチオーバー 37

自動スイッチオーバーと

 自動リバース レプリケーション 37

自動リバース レプリケーション 37

シナリオ 4, 5, 7, 14, 15, 19, 22, 23, 24, 25, 27, 28, 29

準備 8

準備、サーバ 8

情報、ライセンス ii

新規シナリオの作成 14

す

推奨事項 37

スイッチ

 バック 27

 スイッチオーバー 27

 スイッチオーバーとスイッチバック 27

 スイッチオーバーとスイッチバックの実行 27

 スイッチオーバーとスイッチバック、実行 27

 スイッチバック 27, 28

 スイッチバック、スイッチオーバーの実行 27

 スタンダードアロン サーバのセットアップ 7

せ

セットアップ 8

 サーバ 7

 スタンダードアロン サーバ 7

セットアップ手順 4

セットアップ、スタンダードアロン サーバ 7

そ

ソフトインストール 3

は

はじめに 1



ひ

非侵入性インストール 3, 5
非侵入性、インストール 3
ヒント 31
ヒント、WANSyncHA 31

ふ

プロパティ 19, 20, 21

ほ

方式、リダイレクション 3

ま

マスタ
　サーバ 25
マスター サーバ 12

よ

要件 2
読み取り専用、Web GUI 34

ら

ライセンス キー 4
ライセンス情報 ii

り

リカバリ、アクティブ サーバ 32
リダイレクション
　方式 3
リビジョン履歴 iii
リモート 5, 7, 8, 12
リモートインストール ウィザード 7, 8, 12
履歴、リビジョン iii

れ

レプリカ サーバ 12
レプリケーション シナリオの環境設定 14